

Tales of Barbartia ~強力若本(の人の中の)奮闘記~

最上川万能説

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大戦斧を手に戦場を蹂躪する青い狂戦士、バルバトス・ゲーティア。に憑依してしまったド一般人が、肉体に染まってダメな方にガンギマリしつつ、周囲にビビられながら突撃隣の敵陣地するお話。

見切り発車につきエタるかもしません。ご了承ください。

ぶつちやけ個人的にバルバトスは童貞こじらせてると思う。アト
ワイトへの口説き（）とか見ると特に。

第1話
第2話
第3話
第4話
第5話
第6話
7話

目

次

47 39 30 21 14 7 1

第1話

ある時、この星を襲つた災厄——特殊エネルギー反応を発する巨大彗星の落着。地は裂け大洪水に洗い流され、天は粉塵に覆われ、地軸は歪みに歪み、人は自らの絶滅のみならず、星の死すら覚悟した。

しかし、この災厄は同時に希望をもこの地にもたらした。彗星に含まれる外宇宙由来物質の解析により新エネルギー源『レンズ』がもたらされ、その力は人々の熱意と勢いを加速させた。

かくして、若き天才科学者ミクトランの発案による、太陽の熱と光を求めて始まつた『空中都市計画』は、僅か一年で初号都市『ダイクロフト』を浮上させるに至り、人々は新たな楽土の勃興と、それをなした者たちへの惜しみない賞賛に沸いた。

それはそれとして、光明が見えれば馬鹿なことをやらかすのもまた、度し難いことこの上ないが人の業である。いつしか選民思想をこじらせたミクトランが、空中都市に上がり建造と管理維持を任されたエリートたちを扇動。自らをして『天上王』と称し、選ばれし優良種たる『天上人』を率いて荒廃した地上を天空から支配せんとしたのだ。が、いくらなんでも「お前ら劣等種たる地上人は我ら天上人に従うがよいぞフウーハハハアー」などといきなり言われて従うほど、荒廃した地上に残つた者たちは被虐趣味ではない。そもそも空中都市の数も容量もまだ全人類を収容するに足るレベルでないのに、先に上がつたから優良種とかバカか、という話である。

そんなわけで地上人がキレて三行半を叩きつけるのも当然であり、増上慢を急速にこじらせた自称天上人がそれに逆ギレするのもまた必然だつた。アホらしいこと極まりないが、世の中抗争の理由なんぞ大概そんなものである。

かくして、汚染地殻破碎／再利用ユニットを戦略無差別射爆砲として改悪、制空権を頼りにバカスカ撃ちまくる天上軍と、それに歯噛みしつつ資源回収——と言えば聞こえはいいが、要するに労働奴隸や生体兵器製造資材としての地上人拉致である——部隊に逆撃かまして追い払おうとする地上軍との抗争が幕を開けた。世に言う天地戦争

である。

先述したように、地上軍は絶対制空権を奪われっぱなしである。そもそも敵は粉塵の雲天の彼方にいて、さらに空中都市計画のために大型超高出力レンズは大半が敵側にあり、とどめにせつせと技術者たちを優先して空へ上げたため、技術力でも絶望的に劣勢というご覧の有様。なかつたから良かつたものの、ベルクラントに速射性能があつた日には、地上軍は速攻で詰んでいた。なくとも詰みかけてるのは言つてはならないお約束である。

ベルクラント開発チームが亡命に成功し、マンパワーと彼らの空中都市屈指の知性で技術力を補える目処が立ちつつあるとは言え、戦力差が勝敗に決定的な差をもたらすわけではないのが悲しいところ。

そこで、彼ら元空中都市のトップエリートたちと地上軍の誇る異才……ハロルド・ベルセリオスが局地決戦兵器『ソーディアン』の開発を完了するまでの時間を稼ぐべく、天上軍のアブダクション用地上拠点を強襲・撃滅する作戦が立案された。この作戦の要となる強襲コマンドの指揮官に選定された突撃馬鹿、もとい戦闘狂こそこの物語の主役であり、

「敵の大型機動兵器は俺が引き受けます
『敵の間に敵歩兵戦力を減殺します
雑魚が俺の獲物に手工出してんじやぬええい！
雑魚は雑魚らしく雑魚と戯れあつてろ！』

この男、バルバトス・ゲーティア——の肉体に憑いてしまった“中の人”——である。

このバルバトス（の本来の人格）であるが、英雄願望がやたら強く、同時に自分よりも交友関係に恵まれた男を敵視する傾向にあつた。要するに「俺より弱いクセに女侍らすとかフザケてんのかゴルア！」という童貞の僻みであり、そこに「デイムロスは英雄視されてるのに、何故奴より多くの敵を屠ってきた俺はそう見られないのだ!」という彼なりに真面目な、しかし全力で斜め上な懊惱と戦闘／破壊衝動が悪魔合体し、英雄を憎悪するくせに英雄願望ガンギマリな困つたちやんが爆誕したわけだ。

つまり、色々こじらせた童貞が脳内麻薬たっぷりキメちゃつた結果バーサーカーと化したわけだが、人類がそのボテンシャルを發揮する

に大なる役割を果たす負の筆頭は僻みである。残念もクソもないが
ある意味必然と言えなくもない。

さて、寝て起きたら水色ワカメヘアーの暴走きんに君に成り代わつてしまつた“中の人”であるが、彼は基本的に一般的日本人である。つまり割と事なきれ主義的であり、あまり人の上に立ちたがらず、程々の立場で満足する。良く言えば地に足の着いた堅実男、悪く言えば上昇志向のないヘタレである。

戦闘時にバーサーカー的言動しか発せない難儀な言語中枢には苦戦したもの、そんな彼の良い意味での臆病さ——死にたくないがゆえの生存欲求と本来の人格が持つ戦術勘が超融合し、肉体に刻まれた英雄願望とファイジカルスペックゴリ押しでヤケクソ気味に突撃。崩されても困る部分に的確かつ迅速に呐喊し、友軍の危機を度々救う結果に繋がる——と言葉に出させないところでの行き届いた気配りが功を奏し、強襲コマンドの指揮官として抜擢されたのである。

決して「単独遊撃戦力としてしか使えそうにないからフォローミーさせとけ」という投げやりな理由ではない。ないつたらない。

ところ移つて、地上軍総司令部・司令執務室。

「小官を強襲コマンドの指揮官にありますか、リトラー総司令」

「う、うむ。貴官の单騎で増強中隊に匹敵する突撃・突破力を活かし、敵拠点を強襲。追随する隊員が出血を拡大することでこれを撃破し、我が軍の局地決戦兵器……既に貴官も聞き及んでいるかもしれないが、
インテリジェンス・ソード物言う剣『ソーディアン』開発の時間を稼ぐための陽動とする。個人の戦闘力に依存する作戦なのは情けない限りだが、この作戦を行できるか否かは貴官の働きにかかるつているのだ。引き受けてくれるな？」

あの戦闘狂以外に呼びようのないバルバトスが、ある日を境に戦闘時以外は比較的丸くなり、割と話せる性格へと突如変貌。しかも妙に世慣れた気配りを發揮しだし、新兵のケアから戦死者遺族への手紙を認めるのまばつちこい。お前何があつた、と関係者全員が本気で首

を捻る事態に陥つた。

そんなこんなで同じ戦場で戦う兵士からはともかく、それ以外の兵種から引かれることはあまり変わりない彼だが、かつての「突撃隣の敵陣地は死ぬがよい」なイカレつぶりを遠目に見ただけのメルクリウス・リトラーからすれば、彼の落ち着きつぶりには驚き桃の木どころではなかつたようである。一瞬どもつてしまつたのも無理はあるまい。

肉体の狂熱をある程度とは言え制御してのけたあたり、『中の人』の苦労も並大抵ではなかろう。それを察せる者は神の視点を持つ者以外いな^読いのだが――

〔愚問でありますなあ。総司令令とあれば是非もありません〕

〔この体は戦場以外の適性を失つていませんので。小官の命の糧は、戦場にしかありません〕

〔戦つて死ぬか、戦つて死ぬも良し、さらには身を焦がすも良し。本懐であります〕

――訂正。肉体に引つ張られ、色々とダメな方向に覚悟ガンギマリであった。

「そ、そ^うか……貴官の熱意はよくわかつた。貴官が率いるコマンド隊員は、第二会議室に集合させてある。貴官に窮地を救われ、志願してきた者たちから選抜した精兵だ、頼りにしてくれていい。以上だ」案の定引き気味なリトラーに敬礼し、退室するバルバトス。知らず肩に力を込めていた総司令は、嘆息しつゝ肩をコキコキと鳴らし、遠い目で呴いた。

――あれが敵でなくてよかつた。
まつたくである。

第二会議室に集結したコマンド隊員たちは、大恩ある突撃馬鹿の入来を今か今かと待つていた。待望する者たちの熱気は部屋を覆い尽くし、今少し某かの刺激が加わろうものなら、弾けて地上軍総司令部を覆わんとするばかりに軒昂であつた。

ゆえに、彼らの求める男が入室した瞬間、どんな精銳師団にも勝る勢いで、一糸乱れぬ直立不動の敬礼をほぼ無音でやつてのけたわけだが、『中の人』はその色んな意味でのキマリつぶりにガチビビリして

いた。眉をかすかにヒクつかせるだけで堪えた、本体の鉄面皮に感謝しきりである。

さて、バルバトスの配下への初訓示は、おおよそ部下に向けるものとは到底言い難い言い回しで始まった。

「率直に言う。貴様らは弱い、雑魚極まりない」

いきなりこれである。が、パツと見生粹の戦争狂と、そいつにガチ惚れしている戦争狂予備軍どもは身動きもしない。中の人 戦争狂は単に気圧されかけているだけだが、そこは肉体のイカれつぶりでカバーである。

「そしてもうひとつ。俺は雑魚が俺の前で無駄死にするのは好かん。雑魚は雑魚なりに、戦後に経済を回すための底辺に戻らねばならん。ゆえに貴様ら雑魚に、俺の目の前で死ぬことは許さん。

貴様らは俺の後から緩々とついて来い。俺の突撃で敵の撃碎される所、俺が手を下すに値せんゴミどもの処理が貴様らの仕事だ。俺より前に出て英雄的に戦うなぞ俺が許さん。英雄的に戦う雑魚の末路は死のみ、誰も言祝ぐことない無駄死にのみだ。

だが、俺の後ろで邪魔をせず雑魚なりの仕事をこなす限り、俺は貴様らに勝利と栄誉をくれてやる。最も過酷な戦場の、最も過激な突撃について来るだけの簡単な仕事だ。

そしてあらかじめ言つておく。俺の求める戦場の血風は、貴様らを容赦なく死へ誘うだろう。恐れるか？ その心理は正しい。死を恐れるがゆえに人は強くなる。死を恐れ、死を忘れず、死に呑まれない者こそ真の強者である。つまり、俺だ。

だが、貴様らが俺の後に続く限り、貴様らは俺の骨肉も同然である。つまり死してなお、俺と貴様らはひとつである。そして、俺の勝利と闘争は俺の生きる限り永遠である。

ゆえにッ！ 貴様らも永遠である！ 誇れ！ 貴様らは永劫の闘争に足を踏み入れる、荒ぶる漢となる権利を得た!!

貴様らが雑魚として死ぬか、雑魚として生き延びるか！ 一端の戦士になるか、ならないか！ 全ては貴様らの選択次第!!

そしてもう一度言つておく。俺の生きる限り続く勝利と闘争の果

て、貴様らが死のうが、生き残ろうが、脱落しようが、俺と貴様らは永遠であるツ!!

選べ！ そしてついて来られる者だけがついて来るが良いツツツ

!!

応ツツツツツ!!

うろ覚えの海フルメタル・ジャケット兵隊式演説と、

“中の人”的なけなしの善意と、肉体の狂熱がもたらすバーサーカー的言動が合わさり最悪である。

かくして、最強最悪の強襲コマンド小隊が結成された。されてしまつた。敵拠点を完膚なきまでに撃碎し、リバースエンジニアリングすらさせない狂氣の強襲小隊。リトラーに胃薬を処方させた元凶。立ち塞ひきふさがるあらゆる障害を打ち碎き、敵将の喉元を躊躇なく抉り抜く地上軍機密にしておきたかつた秘密兵器の秘密兵器。

後の世に『殲滅兵团』の名で、戦慄と恐怖をもつて鮮烈に刻み付けられた、戦馬鹿どもの始まりであつた。

第2話

特 殊 強 襲 コ マ ン ド 作 戰 記 錄 0 1
オペレーショングロッグ

（機密指定）月（機密指定）日 0600 払暁 作戦開始

天上軍の地上拠点からほど近く、センサー有効半径のギリギリ外にある丘陵地。粉塵で覆われたかつての蒼穹、核の冬で世界を覆つた曇天を、僅かに赤みが彩り始める。古来より、夜襲を警戒しすぎて気の緩んだ敵を強襲する際に好まれた頃合いだ。

その丘の上、しぶとい雑草が生い茂る中に、右肩に大戦斧『ディアボリックファング』を担ぎ、片膝ついてしゃがみ込む蒼衣の男あり。水色の無造作に伸ばした癖毛の中から、血風吹き荒ぶ戦場を希求する狂氣と戦意を爛々と輝かせる眼。言わずと知れたバルバトス・ゲーティアである。

そこから僅かに離れて、彼の旗下で戦場を駆けることを選んだ戦闘狂予備軍、その数たつたの25人。彼の訓示という洗礼を受け、さらにはバルバトス直々の実戦以上に苛烈な選別訓練を乗り越えて馳せ参じた、地上軍の誇る狂戦士ランキングのトップ26（バルバトスを含むが、当然彼が永世終身名誉一位）。この増強2個分隊程度の寡兵が、しかして地上軍最強にして最凶の強襲突撃部隊であった。

しかし単体戦力最強は誰か、という話になると、決まつてバルバトスは不機嫌になつた。総合能力でデイムロス・ティンバー中将一択、というのが地上軍のほぼ総意だつたからだ。バーサーカーでなければバルバトスもいい勝負できたのに、という評価が、なおさら彼の肉体に残る本能を刺激した。リア充死すべし慈悲はない、的な意味で。デイムロス爆発しろ。いや爆発はヤツの力になるから凍結粉碎しろ。主にイチモツが。あと胤とタマも。

閑話休題。

「^{ボス}中佐、お時間です」

瞳をぎらつかせて総身を震わす戦鬪狂に、副官のボールドウイン中尉が肩を叩いてささやく。クハ、とバルバトスの口が歪んだ三日月に

吊り上がり、待ち受ける蹂躪と殲滅の喜悦に、改めて総身がぶるりと大きく震えた。突撃パティータイムのお時間だ。

「要諦は変わらん。貴様らは緩々とついて来い。一番槍は俺だけのものだ」

そう後ろに聞こえる程度にささやき、地上軍の誇りたくない殲滅マニアが身を起こす。僅かに前のめりの突撃姿勢から、ぐうつと上体を捻り、解放のカタルシスを求めてギリギリと全身の筋肉が戦慄いた。それを確認した配下たちが、各自するすると己に見合った突撃姿勢をとる。その間僅かコンマ6秒。配下に支障なし。慢心なし。搖るぎなし。

——今！

「号お砲いつぱああつ！ ジエエノサイドお、ブウレイバアアアアアアアア！」

斧頭から迸る滅殺の波動が、敵拠点のメインゲートを歩哨型無人機もろとも微塵に碎き、盛大なキノコ雲が立ち昇る。斧から波動をぶち撒けた反動をその場でぐるりと一廻りして殺し、その勢いのままに突進。丘を駆け下りた直後に余勢を駆つて跳躍。砲撃の余波で大破、痙攣する無人機を盛大に着地で踏み碎き、ワラワラと這い出てきた生体兵器や無人兵器を睥睨、凶相が喜悦に歪んだ。

「悪いが今日の俺は少々テンション高めだ……運がなかつたなあ、ガラクタども——クカ、カ、カハツ、クアツハハハハアアアア！」

こういう場では体の赴くままに暴れた方がうまくいく。それをわかっている“中の人”も制御を率先して手放し、“暴斧のバルバトス”が肉体の求める蹂躪を存分に味わうべく、持てる力を解き放つ。

——微いい塵に碎いてやる、まずは小手調べに……這いつくばつて貰おうかあ！！

蹂躪、開始。

——同月同日同時刻、突撃するバルバトス・ゲーティア中佐後方、コマンド隊員

——号砲一発！ ジエノサイドブレイバー！！

「おいおい、あれが号砲かよ……どう見たって必殺技か何か、それも超

が付くレベルじゃねえか」

バルバトスブートキャンプ怒鬼☆狂戦士短期集中教練過程

襲コマンド。その合格者の中でも実力こそ最下位でありながら、候補者唯一無二の特殊技能——天上軍通信機器への逆探・傍受。それを見初められ引き立てられたのが、このメルヴィル曹長である。もつとも、彼を推薦したのは禿頭ボルのベテラン副官ボードウイン副官であり、本来隊内人事を掌握して然るべきバルバトスは「特殊技能持ちなら多少成績に色をつけるも吝かではないな、ついでに技能手当も割増で付けてやるか」程度で判を捺したのだが。

ともあれ、戦場で救われ、次いで技能を的確に評価されたのだから、メルヴィルの忠誠心はトップ高である。高笑いしながら敵兵器群をスクラップと謎肉に変換する遊戯に勤しむ大将と、その後方からスルスルと展開し、彼の振り回す戦斧の加害範囲外の敵をサクサク横合いから叩きのめす同僚を横目に、彼は傍受した敵指令電波逆探のために背負った機器をフル稼働させた。

幸い、この拠点に勤める天上人は勤務態度とモラルにいささか以上に欠けるらしい。まさか拠点の指令回線に公用回線を用いるなど、アホを通り越して白痴かお脳の病気認定待つたなしである。敵のバ之力加減とモラルハザードと所属部隊の精強ぶりに感謝しつつ、隊の目と耳を担う通信兵は一步引いたところで隊を指揮するボールドワインに駆け寄つていった。

「副長、ボールドワイン中尉！ 敵指令系統及び傍受した指令電波について、ご報告が——」

——同月同日 0630 バルバトス爆心地・ゲーティア中佐周辺
「弱アい！ 脆オい！ 骨がぬあああい!! 下らん、つまらん、飽きた！」

当たるを幸いに愛斧を振り回し、スクラップと謎肉の製造業者として精勤していた“地上軍の思考する破壊衝動”ことバルバトスだが、こうも歯応えのない敵ばかりだと飽きが来る。まあ、この歯応えとい

うのも彼の恵まれすぎた戦闘能力ゆえに評価が辛くなるものであり、彼が無造作に爆散させている無人兵器1機、あるいは適当な一振りで一山幾らな勢いで薙ぎ払われる生体兵器1体で、地上軍一般兵2人相当な戦力評価であることを鑑みれば、彼の撒き散らす破壊がデータラメすぎるだけ、ということはご理解いただけるだろう。

そんなわけで、より乱雑かつ適当に破壊を撒き散らす我らが突撃殲滅型バーサーカーだが、こんな彼でも友軍誤射だけはしたことがあつた。

「誤射なんぞしでかして投獄されたら、俺の戦いでは満たせん渴きを癒すどころか、渴ききつて干からびてしまうではないか!!」

という、全力で我欲&打算の純度100%な言い分であったが、さすがにその程度の分別もない無差別MAP兵器を軍に置けるわけがないから、一応理由としては妥当と言えなくもなかつた。

そんな天上軍における相対したくない地上軍_{蛮族}将校ランキング永世終身名誉一位が、目に付く敵性体をあらかた斧の鍛の素に変換し終えた頃、ボールドウインが悠然と彼の下に歩み寄る。片手に持つ乱雑に走り書きされた紙片は、メルヴィル曹長から渡された敵通信の傍受結果だ。

「ボス、メルヴィルが敵指令電波逆探に成功。連中、間抜けにもほどがありますな……こりや敵さんの公用回線だ。探れって言つてるようなもんです。発信源はグリッドD、通信施設と思しきアンテナ群付属設備β」

歯応えのある的ならともかく、雑魚な上に傀儡に頼り切り、自ら殴り掛かる度胸すらないドヘタレに対する評価などトップ安。ましてそれが回線の防諜すら理解していない白痴級の大間抜けなら、いつも憐れみすら抱きそうになるのがこの狂戦士だつた。

敵が無能すぎて逆に笑いがこみ上げ、思わず鼻を鳴らす。

「フン、眼え見開いたまま夢でも見てるんだろうよ。なら何も見ないで済むようにしてやろうじゃないか、今日の俺は少々慈悲深いからなあ—— 破滅のグラングヴァニッシュ!!」

駆けつけ一発上級晶術_{グラングヴァニッシュ}、周囲の施設もろとも当該施設が砕け散る。

確かに、真正面から殴り込んで血煙にするよりは多少なりとも慈悲のある殺し方と言えなくも――言えない。当たり前である。

それにしても、テンショングアタ落ちは、面倒臭がつて上級晶術ぶちかましてなさすぎてテンショングアタ落ちは、面倒臭がつて上級晶術ぶちかまして塵殺完了するあたり、やはり魂が違えどバルバトスはバルバトスであつた。

「これ以上、気晴らしにぶち壊せるものもない。作戦終了、帰つて風呂とメシだ！ ボールドウイン！」

つまらなさそうに斧を肩に担ぐバルバトスに敬礼し、ボールドワインが吼える。

「イエス、ボス。オラ、野郎ども！ 作戦終了、帰投準備！ 40秒で支度しろ！」

――サー・イエツサー！

狂戦士どもが唱和し、どやどやと隊列を整えて去つていくや否や、元拠点は静寂に包まれた。動体目標未検知、生命反応なし、敵性体完全殲滅。

完全な死と静寂に覆われたこの地が調査隊の喧騒で満たされるには、今しばらくの時を要した。

――同月同日 0600 払暁 天上軍第三地上拠点

天上人にとって、『資源回収』は左遷か、己の評価価値の低さの証でしかない。また、大量の無人兵器や地上人のクローラン量産体を改造した生体兵器、言うなれば傀儡の軍勢に地上の戦線維持を委ねているため、自らが前線に出ることはまずないと言つてよかつた。ゆえに士気は最低、モチベーションはド底辺、センサー類の監視もルーティンワークになりつつあつた。

その日も僅か10人の天上人が持ち回りで雑務と各種兵器群のささやかなオペレートをこなしつつ、任期満了で空中都市に上がる日を待ち望んでいた。今日が最終日なのが2人おり、彼らは暇と無駄を持つて余す同僚たちの中では比較的精力的だつた。

――まさかそれが、己の死を招くとも思わず。

まあ、どうあがいても絶望、もとい死神の鎌、あるいはバルバトスの斧は首筋に密着していたわけだが。

任期満了を前に、少しばかりアピールできることを増やさんとしたが、いつもより三時間も早起きした天上人Aはメインゲートのメンテナンスハッチ前に屈み込んだ。ハッチを開けて個人端末と電送ソケットをコードで繋ぎ、ゲートの簡易自己診断プログラムと端末内の詳細点検用プログラムを同期させる。特に異常なし。センサーに反応なし。動体目標確認されず。ゲートの索敵ログもいつも通りの敵性反応^ガ確認されず。さて、やることやつたし早めの朝食と――

――何の光？

閃光。炸裂。爆轟。滅却。立ち上がる間もなく、迸る閃光の奔流が視神経を焼き尽くし、閃光が身に纏う灼熱が眼球を煮え立たせた後蒸発させ、次いで上皮組織を焼き尽くす。幸運にも、この時点で天上人Aは即死――身体前面の上皮組織焼灼によるショック死――していった。続いてゲートそのものを微塵に碎く爆発が骨肉を細胞単位で飛散させ、天上人Aは文字通り地上からその痕跡を消失させた。

その爆発がメインゲートを文字通り灰燼に帰したものと最初に知ったのは、任期満了ということで早朝勤務のオペレーターを押し付けられた天上人B。泡食つてタイプミスしながらも、どうにか拠点内の全兵器をスクランブルさせる。恐らく蛮族の工兵が爆破工作でもしたに違いない、全戦力でゲートに殺到する敵奇襲隊を逆撃、逆侵攻をかけて蛮族の拠点を落とせば凱旋帰国、俺は出世だ――

そんな夢想に浸つて30分少々現実逃避に勤しんでいた天上人Bは、当然屋外で敵首魁（スクランブル兵器群ほぼ制圧済）と副官が交わした言葉など、知る由もなかつた。

――ボス、メルヴィルが敵指令電波逆探に成功。連中、間抜けにものどがありますな……こりや敵さんの公用回線だ。探れって言つてるようなもんです。発信源はグリッドD、通信施設と思しきアンテナ群付属設備β。

――フン、眼え見開いたまま夢でも見てるんだろうよ。なら何も見えないで済むようにしてやろうじゃないか、今日の俺は少々慈悲深いか

らなあ——破滅のグランヴァニッショ!!

瞬間、大地より沸き上がる破壊の暴流が地割れとなつてオペレーシヨンブース周囲を飲み込み、噛み碎き、咀嚼し、吐き出す。破壊エネルギーの余波が渦を巻いて周りを巻き込み、近隣にあつた天上人宿舎を天上人C～Jもろとも碎き散らした。あれではどんな頑強な兵士でも数秒持つまい。

——これ以上、気晴らしにぶち壊せるものもない。作戦終了、帰つて風呂とメシだ！ ボールドウイン！

——イエス、ボス。オラ、野郎ども！ 作戦終了、帰投準備！ 40秒で支度しろ！

——サー・イエツサー！

地上軍情報部 特殊強襲コマンド運用作戦における覚書 草案

——かくして天上軍第三地上拠点はその基幹設備をことごとく破壊され、拠点機能を完全に喪失。灰燼に帰した天上軍機器からのリバースエンジニアリングは不可能、との報告あり。比較的主戦場から離れた場所での戦闘——と呼ぶのが躊躇されるレベルの殲滅戦ではあつたが——であつたため、即座に陽動ないし挑発と看破されはしたが、敵方からしてもわざわざ奪還するような重要拠点でもない。周辺に交戦規定ROEをオミットされた無人兵器群が嫌がらせ的に撒かれた程度で、この戦闘に関わる諸事は終結を見た。

総合的に見て、敵視点を主戦線及び総司令部から一時的に逸らすことには成功したものと思われるが、ソーディアン・プロジェクトと類似の発想に天上軍が至らないという保証はない。彼我の総合的技術の絶対格差と保有資源量を鑑みるに、敵がソーディアン類似兵器を投入した場合、製造可能な数的絶対差により、我が軍のソーディアン部隊は敗退する公算が大である。

結論として、迅速にプロジェクトを完遂させ、ソーディアン・マスターとラディスクロウ機動要塞化によるダイクロフト強襲制圧作戦を発令させるべきである。

第3話

ある曇りの昼下がり、地上軍総司令部駐屯地、特殊強襲コマンド本部の執務室。

「ぬう……やはり書類仕事は好かん」

「そうは言いますがな中佐^{ボス}、仮にも指揮官なんですから。好き嫌いで書類は減りませんぞ」

「そう言われても俺とて困るわ。万年兵士の俺に『これ以上手当を付けようがないから昇進させてもらう』と言つたくせして、士官教育ひとつしなかつたのは上層部^{うえぶ}のお歴々だぞ。俺が拒否したわけではない」

「ああ、戦果に見合う褒章のアテが昇進^{そなへ}に付く手当しかなかつたと。そりやまた難儀ですなあ」

そう副官とボヤきあいながら、書類の担当士官署名欄にペンを走らせる蒼髪^{サラリーマン}の男、バルバトス。彼の“中の人”とてかつては一応それなりの勤め人、この手の書類仕事は不得意ではない。ないのだが、あくまで現代社会の高度に電子化されたそれに対してもって、電子化どころかコピー機の存在すら怪しいこの世界では、彼の書類処理スキルなど、そこらの兵士とさほど変わりない水準に等しいと言つてもそう過言ではないのだ。

第一、特進に特進を重ねた中佐に書類仕事ができるかと言われれば、普通は“無理すんな”がオチである。指揮や手書きの書類作成スキルなど、本来この世界での指揮官に求められるスペックのほとんどを虚空の彼方に投げ捨てているバルバトスにとつて、それらを外付けでそつなく代行してくれるスキルヘッドの副官は、コマンドの維持に絶対不可欠な存在だった。そもそも戦場の修羅に平時の仕事を期待するほうがおかしい、と言わればそれまでだし、それ以前に単身呐喊しかしてこなかつた男に指揮スキルを求める、その発想 자체が無謀である。

もつと言えば、戦況がバルバトスに前線勤務を強いたというのも一因だつた。うまいこと使えば単騎で戦術的劣勢を覆せ、さらには戦後

も生きていてもらわなければ困る地上軍の英雄と違い、戦死したとしても戦後に与える影響はない。どころか、その狂戦士ぶりを見るに戦後は居場所絶無なのがほぼ確定しそうな男である。士官教育しなくとも問題あるまい、という結論もある意味妥当ではあつた。

が、それはそれとして、本来組織としてせねばならない教育を怠っているのも事実。戦後の再編でその辺苦労すんじやねえかなあ、などと内心リトラー以下総司令部に同情しつつ、署名マシンと化してひたすらペンを書類とインク壺に往復させるバルバトス。さしあたり提出期限の近い書類を処理し終えた頃には、曇天からうつすらとけぶる太陽は中天をとうに回っていた。

椅子の上で野郎二人して背伸びし、肩や首をゴキゴキと鳴らす。朝も早よから書類と格闘していただけあって、だいぶ凝りが溜まつているようだつた。特にそろそろ四十の大台が見えてくるボールドウインは、ウンザリした顔である。

「うーむ、トシ食うと無理が利かなくなつて駄目ですな。ボス、やはり事務屋を数人手配できませんかね？」

「事務処理ができる奴はどこも手放さんだろ。志願してくる雑魚どもは大概戦いたがるし、それ以前にここがどういう所か考えればな。目端の利くような奴がのこのこやってくる部署でもあるまい」

バルバトスも渋い顔である。この基地で事務処理スキルを持つ者は、概ね総司令部直下の参謀本部、技術本部、重輪重本部で独占されており、市井にいたとしても商会勤めがほとんどで、比較的総司令部に近いバルバトスのコマンドにさえ流れてこないのが実情だった。

無理からぬ話ではあつた。戦争初期に示威目的で行われた対都市射爆で、都市部にいた多くの市民が大地もろとも吹き飛ばされているのだ。奴隸階級としての人的資源回収^{地上人拉致}に天上軍が移行した時点で、地上に残つていた高等教育受講層のかなりの割合が、大地と運命を共にしている。リトラーが若くして地上軍総司令官をやつているのも、彼自身の類稀なる軍略、ここまで難を逃れてきた強運も然ることながら、彼以上の軍歴を持ち、なおかつ総司令官を名乗るに値する人物が、軒並み初期時点で消し飛んでいたからだ。

そんなわけで、どうあがいても配属されない者筆頭が事務要員というのは、各戦闘単位においては周知の事実でしかなかつた。ボールドワインもわかつてゐるのだが、それでも愚痴のひとつは溢したくなるのが人情である。

「ですか。ま、若いのに少しずつ覚えさせるしかありませんか。先は長いですなあ……」

肩をすくめた副官が、ところでボス、と話題を変えた。当面の事務処理は終わり——バルバトスはひたすら署名していただけだが——隊が非番となれば、基地周辺の商業区で昼食と洒落込むこともできるのだ。食べに行くなら場所を早めに決めておいてもらわないと、出頭令を携えた伝令が無駄に走り回ることになつてしまふ。

そう、商業区である。主要都市を消し飛ばされ、統治機構の大半を消し飛ばされた地上にあって、ほぼ唯一まとまつた統治機構であり、同時に巨大な消費機構でもある地上軍基地周辺の安全圏には、経済効果を狙う商会やその下請け、人夫に娼婦、その他諸々多くの人々が集い、一大経済区を形成していった。だいたい、軍という目に見える力の近くにいた方が安心するのが、世紀末なこの世界の一般人である。多少自衛できたとしても、天上軍の機械／生体兵器にはどうしても敵わないし、それでなくとも便利ではあるからだ。

軍施設があるからこそ天上の標的にされるというデメリットもあるが、それを抜きにしても、人知れず殺されたり天上人の奴隸にされるくらいなら、地上軍基地攻防戦に巻き込まれて死ぬほうが幾らかマシ、というか納得がいく。それが地上の非戦闘員たちのほぼ総意だった。

ともあれ、メシである。総司令部が存在する最重要拠点だけあり、こここの商業区はかつての都市部に匹敵する賑わいと規模を誇つている。非番の日はひたすら訓練と食べ歩きと武器の手入れに費やす我らが愛すべき狂戦士も、行きつけの飯屋を幾つか脳内にリストアップしていた。配下との訓練に備えて軽めで腹持ちするものにするか、はたまたガツツリいくか。今日はガツツリの気分だな、とバルバトスが訪問予定の定食屋の名を挙げようとしたところで、執務室にノックの

音が響く。

「……入れ」

あからさまに機嫌を損ねた隊長の地の底から響くような若本ヴィオイスに、おつかなびつくり隊員が扉を開ける。片手に何事か書き付けてメモを携えていた。

「失礼します。技術本部からの出頭要請であります、サ一。可能な限り速やかに出頭せよ、と」

「……予定変更だ、ボールドウイン。メシは食堂で済ませる」

いつそ歯ぎしりしそうなほど不機嫌なバルバトスに、副官も苦笑い。この状況で苦笑できるこの辺の年の功というか、いい意味でこなれた団太さとでも言うべきものが、隊長と副隊長の円満な関係に一役買っていたのは確かである。普通は苛々を振り撒くバルバトス相手に、苦笑なんぞできる訳がない。いざ戦いとなればバルバトスの後ろからヒヤツハー言いながら突撃する、勇猛果敢を通り越してアドレナリンガンギマリなこの不幸なコマンド隊員でさえ、頬の引き攣りを抑えきれないのだ。この男、何だかんだ言つて結構なレベルで人外じみている。

「イエス、ボス。しかし、出頭要請はいかがします？ 可及的速やかに、だそうですが」

「メシの間くらい待たせても罰は当たらん。可及的速やかに参上してやるとも、食い終えてからな」

一瞬の激発こそ回避したものの、それでも不機嫌を隠そとしないバルバトスが、むつすりとした顔で執務室を出る。げに恐ろしきは食い物の恨み、と言うべきか。一般的日本人な“中の人”にとつて、日々の食事と風呂だけは疎かにすべからざるもの、それこそ神聖にして犯すべからざるレベルであつた。美味しいメシに舌鼓を打ち、ゆつたりのんびり湯船で癒やされてこそ、生業たる任闘争務にも気合が入り、身が引き締まるというものだ。バカにされたらマジギレ待つたなしである。バルバトスボディでマジギレ。大惨事不可避、デイムロス出動待つたなしな超非常事態と言えよう。

ともあれ、普段より眉間の皺が深く、普段よりやや目つきが剣呑で、

おまけに「俺は不機嫌なんだ退いてろ雑魚ども」と全身で語っている地上軍最凶戦士が前から歩いてくれば、まともなメンタル持ちならモーゼの前の海が如きもの。飛び退る勢いで道を譲り、通り過ぎてからくわばらくわばらと胸を撫で下ろしつつ、「はて、何であんなに不機嫌なんだ？」出撃禁止令でも出されたんだろうか?」などと顔を見合わせたりしていた。少なくとも、出撃禁止令などを出されたら若本反乱待つたなしである。最悪、総司令部が周辺ごと地図から消える。

妙なところで噂を呼びつつ、蒼い戦闘狂が食堂の扉を押し開ける。既に食堂としての繁忙期は過ぎているとは言え、総司令部は年中ほぼ無休で不定期勤務なデスクワーカーの總本山である。中にはまだそれなりに人の姿があつた。今から食事を注文する者、食後のコーヒーと洒落込む者、カップをすすりながら何事か書類に書き付ける者。

そんなところにむつすりとした顔で、しかもめつたに来ない男がやつて来たのだから、視線がレーザーか赤外線シーカーめいて集中するのも無理からぬ事ではあつた。が、今のこの男、なかなかに不機嫌である。片眉をヒクリと戦慄かせ、向けられた視線を逆に睥睨して鎮圧すると、トレーのもとまで足音高く歩み寄つた。何はともあれ昼飯はよ。外で食えなかつたんはもういいからはよ食わせる。実際それくらいしか考えていないのだが、しかし強力若本な見た目ではただの不機嫌なバルバースである。威圧感バリバリだつた。

が、トレー片手に威圧全開のバルバースに相対しているにもかかわらず、食堂の主は平常そのものだつた。やはり兵の胃袋を物理的に握るだけあって、肝つ玉の出来が違うらしい。あまつさえ氣さくに話しかけるのだから剛毅である。

「ありや、バルバースの大将！ 隨分とお見限りじゃないか。商業区に行きつけの店とかないのかい？」

「腹立たしいことに、食いに行こうとしたら出頭要請よ。ふん、メシの間くらい待たせても罰は当たらんだろうとも。問答はいい、とにかくメシだ。カレー特盛り、A・S・A・P・^な_{るべく早く}でな」

——あいよ、カレー特盛りね。

器の半分にこれでもかと盛られたライスの横に、これまたこれでも

かとカレーが注がれる。それをうずうずしながら見つめるバルバトス。特盛りともなれば、もはや並盛り二杯分強である。これだけ食べた上で激しい訓練に胃が戻えないのだから、狂戦士の肉体はやはり規格外であつた。

そのカレーの上に、ガツツリ一枚分のカツが乗せられる。これにはさすがにバルバトスも困惑の表情を見せた。

「おい、カツは頼んでないぞ」

それに応える“おとつあん”の渾名を奉られた主は朗らかなものだ。

「なに、あたしからの個人的なお礼だよ。甥っ子が所属してる部隊が包囲された時、それを打通して退路を確保してくれたのが大将だつて聞いたもんね。甥っ子も無事帰ってきたし、これくらいじやお礼にならないかもだけどさ」

そういう事なら、ありがたくいただいておく。そう返したひとり増強中隊は、幾分不機嫌さを和らげていたようであつた。

——カレー特盛り、お待ち。

トレーに特盛りカレーと付け合わせのサラダを乗せ、足早なのは変わらないが、多少表情を和らげたバルバトスは窓際の席に陣取つた。ピッチャヤーから冷水をコップに注ぎ、両手を合わせる。この世界の民からすれば少々異質な食前礼、しかし“中の人”には慣れ親しんだそれ。

——いただきます。口の中で小さく言葉を転がし、スプーン片手にカレーを崩しにかかる。よく煮込まれている。意外にもたっぷりゴロゴロしている具は、煮込んだ後からさらに追加されたものだろう。煮溶けた野菜の旨みと、程よい辛味が舌を刺激する。カレーを一口、二口。冷水を一口。カツを一切れ頬張り、またカレー。カレー、カレー、冷水、カレー、カツ、カレー、冷水、カレー、カレー、漬物、カレー、カレー、サラダ、カツ、カレー、カレー、冷水、冷水を注ぎ直し、カレー、カレー……。

意外や意外、ときおり器とスプーンが擦れる音やコップの置かれる音以外、ほとんど無音の食事であつた。瞬く間にカレーをたいらげ、

最後に水を飲み干し、実にわかりやすく機嫌を直したバルバトスは、トレー返却口で機嫌よく「ごちそうさん」と挨拶まで披露し、呆気にとられる目撃者を後目に食堂を後にした。

呆然と食事を見ていたとある士官が、ぼそりと呟いた。

「まさか、ゲーティア中佐があんな上品にお食事されるとは思わなかつた……」

間違いなく、その場にいた者たちの総意であつた。

第4話

食堂を出て大股で技術本部へ向かう道中、バルバトス・ゲーティアのすっかり回復したかに見えた機嫌は再び緩降下しつつあった。実際に命を預け合う兵士たちはともかく、兵士よりもずっと多い銃後を守るそれぞれの要員が、彼を見るたびに密々コソコソともつともらしく囁きあつてているのを耳にすれば、機嫌の下がり具合が緩降下で済んでいること 자체が奇跡と言わざるをえないだろう。

まあ、わからない話ではないのだ。地上軍兵士として勤務する間に、バルバトス・ゲーティアの悪評は地上軍の隅々にまで知れ渡つていたし、それがある日突然まともな人格に矯正された、などと二年前の兵士たちに告げれば、それこそ“地上軍ジョーク”とみなされて一笑に付されていただろう。

実際、「味方殺しをしないだけまだ理性がある」という評価を当の総司令部が下していたのだからお察しである。そういう周囲の機微を理解できるだけ、現在の“中の人”的バルバトスにもたらした影響は絶大なのだが、それをほぼ会うことのない後方要員に理解させろ、というのもどい無理な話だつた。

が、それはそれ、これはこれ。己の憑依以前の人格がどれだけアレかということを知つてはいても、それを理由にしたり顔かつ聞こえよがしの密談をそこかしこでされれば、こめかみに青筋のひとつやふたつ浮き上がるのが人情というものである。実は別に聞えよがしではなく、絶え間なく続く闘争で鍛え上げられた彼の聴覚が敏感にそれを聞き取つていただけなのだが、聞こえて認識してしまえば変わらない。これが元来の人格であれば、威しに背の大斧をブン回すくらいはしただろう。事実、背中に手が伸びるのを必死に堪えさせられたのだから。

そうこうするうちに技術本部の座する技術本棟に着いた“地上軍の呼吸する闘争本能”ことバルバトスだが、そのエントランスで珍しくも懐かしい人物と再会することになつた。彼の背負う超規格外大戦斧^{ディアボリックファング}の設計者にして、技術本部の実務を一手に担う屋台骨

——技術本部副部長である。彼は地上軍隨一のバトルフリーエクスにすらにこやかかつ友好的に接してのける地上軍きつての聖人であり、彼がいなければ技術本部はただのマツドの巣窟でしかない、とまで謳われた人物だつた。

とは言え、「裏切りと味方殺し以外はなんでもやる」と前線以外で悪名高きバルバトス・ゲーティアに笑顔で話しかけるのだから、周囲がぎよつと目を剥くのは当然と言えた。

「おや、バルバトス君。君が技術本部それに来るのは、背中の大斧を作つた時以来だね。出頭要請した側が言うのも悪いけど、規則で一応照会しないやならないから、もう少し待つてくれないかな」

彼らの愛すべき副部長がいつ狂戦士の機嫌を損ねて縊り殺されるかわかつたもんじやない、とハラハラしながら見守つていた職員たちだつたが、それに応えて穏やかに話すバルバトスの姿に、心臓を直接握られるような衝撃を受ける羽目になつた。ありていに言つて S A N 値直葬である。

「ああ、お手数をかける。しかし、俺がディアボリックファンタジングを頼みに行つたのは、常時狂つていた頃の俺の最大の功績だな。折れず曲がらず毀こぼれず、いつだつて俺の闘争についてきてくれた。貴方のおかげだ」

その場の技術本部職員が、第一印象的にありえない現状に白目を剥きかけて S A N 値チエックする傍ら、二人の和やかな会話は、受付職員が我に返つて職務を遂行するまで暫し続いた。

「ああ、照会も終わつたみたいだね、待たせてすまない。ここから東の階段で地下一階に下り、第二兵装実験室に行つてくれ。そこで本件への説明がされることになつてるんだ。

実のところ、僕が説明してもいいんだが、それで先入観を与えるのもよくない。すまないが、何も聞かずに行つてくれないか?」

申し訳なさそうな副部長に首肯を返し、最近丸くなつたと有名な狂戦士は告げられた先へと向かつた。足早に階段を下り、地下一階の廊下で視線を左右に向ける。左手に“第二兵装実験室”的室内札を見てとり、そちらに足を向けたバルバトスの前に、一人の少女(?)が

立ち塞がつた。

少なくとも、見た目は非常に小柄な女性である。寝癖なんか少々乱雑に癖の付いた赤髪、袖口に黒のボンボン、肩に白い肩当ての付いた、色彩の自己主張の激しい衣装。バルバトス好みからするとややアイラインが濃いような気がしないでもなかつたが、もしかすると目元の隈を隠すためのものかと思い至り、それを口に出すのは自重した。そうでなくとも、女性のメイクに口出しするのは色々な意味で死亡フラグである。

「あんたがマジキチバーサーカーって噂のバルバトス・ゲーティア中佐？ このハロルド・ベルセリオスを待たせるとはい度胸じやない」

コレがハロルド・ベルセリオス!? どこからどう見ても女ではないか！ 珍しく混乱したバルバトスは、思わず自称ハロルドの首根っこをつまみ上げてしまつた。基本的に「今日の俺は紳士的だ（リアルガチ）」を地で行く、ノーマルモードの彼にしては珍しい醜態である。「貴様がハロルド・ベルセリオスだあ？ 馬鹿言つてんじやねえ、その背格好と面構えのどこが男に見えるつてんだ。……しかし貴様軽いな、ちゃんとメシ食つとるか？」

首根っこを掴んだまま、ジロジロと無遠慮な視線を女性のあちこちに向けるバルバトス。先述のように基本的には口調を除けばだいぶ真つ当に矯正された（ようく見える）彼だが、こうして混乱すればかつてに近い言動をかますこともあつた。極めて珍しく、よほど混乱してないと見られないことだが。

こらー降ろせー。無遠慮にジロジロ見られてさすがに羞恥心が沸いたのか、それとも単に扱いが気に食わないだけなのか、ゲシゲシと脇腹から太腿に蹴りをくれる自称ハロルドに目もくれず、右手に女性をぶら下げた彼は第二兵装実験室扉のインターフォンに手を当てた。「バルバトス・ゲーティア中佐、出頭要請により罷り越した。入室許可を願いたい。それと、ハロルド・ベルセリオスを名乗る女性を捕獲したんだが、コイツは一体、……！」

最後まで言う間もなく、実験室の自動ドアが開き、赤毛の青年が飛

び出してくる。バルバトスがつまみ上げていた女性の脇を支えるよう抱き上げて引き離し——あまりの剣幕に珍しく一步引いたバルバトスが、青年が体重を支えたと見た瞬間に手際よく手を放したというのもあつたが——背後に庇うように立つた。

「——失敬、確かに彼女は私の妹、ハロルド・ベルセリオスだ。まあ、見ての通り偽名なんだけれどね。自己紹介が遅れたが、私はカーレル・ベルセリオス。地上軍軍師として、中将を拝命している」

——これは失礼した。即座に上官に対する礼をとるバルバトスに、カーレルの背後からハロルドが胡乱なものを見る目を向ける。あたしの時は随分違うじやない、と顔全体で語っているが、バルバトスからすれば当たり前だつた。男性名、それも地上軍にあつて天上軍の最高知性に勝るとも劣らない異才の名を名乗る、どこからどう見ても絶対に男に見えない女が軍施設内にいて、疑わない方が色々とおかしい。看過する者には SAN 値チエックを真剣にお勧めしたいところである。

閑話休題。

「時間も押してることだし、手際よくいこう。ハロルド、中佐に説明を。中佐、話は中で」

カーレルの音頭で三人して入室すると、そこはゴチャヤゴチャヤと機材の乱立するカオスの支配地だつた。あちこちの機器に接続され、所狭しと床を這い回る晶力伝導ケーブルや、散らばつたメモ書き、作業台の上に積み上げられた、試作品と思しき兵器群のモックアップと設計図、それにレーシヨンや簡易栄養食のゴミ。まさに足の踏み場もない。

そんなカオスのド真ん中にぽつかりと空いたまともな空間——どうやら、この空間をもつて実験室と言い張つてゐるらしい。実質的には設計室に実験スペースが付いただけ、としか見えないが、しかしその実は対爆を筆頭に各種防護処理を厳重に施した、極めつけに頑丈な場所だつた——に、寄り添つて立つ男女の姿があつた。

「ティムロスか、久しいな……それに、ぬう……アトワイト、か」

この男にしては妙に歯切れの悪さ、微妙にばつの悪そうな表情が目

につくが、それも当然と言えよう。現行人格が憑依する前日まで機会あらばストーキング＆口説きまくり——無論、童貞こじらせた脳筋バカの告白など、歯牙にもかけられないものだが——そして被瞬殺記録を更新し続けた相手に、どの面下げて接しろというのか。まともな羞恥心があるなら、三跪九叩頭して半径数百m圏内から離れるべき事案である。まして任務とは言え歩み寄る必要があろうとは、無茶振りもいいところだつた。

空きスペースに歩み寄るカーレル以下三人を視界に入れ、デイムロス・ティンバーはやや困った顔をし、アトワイト・エックスは露骨に顔をしかめた。デイムロスからすれば、ナチュラルボーンバーサーカーがリミッター付きバーサーカーに確変し、周囲との折り合いを付けられるようになつた時点で、バルバトスに対してそう悪感情は持っていない。デイムロスにとつてのバルバトスは、己を過剰にライバル視してくる狂戦士というだけで、恋人たるアトワイトへのストーキングを除けば、今まで特に実害らしい実害はなかつたからだ。恋人と件の狂戦士の間で起きた問題と、彼女との関係でどう折り合いを付けるべきか、と悩んではいるが、それはどちらかと言えば彼と彼女の間の問題である。

しかしアトワイトにとつては別だ。彼女からすれば、そこの青色暴走きんに君は自分に執着するガチムチ変態ストーカーであり、デイムロスの護衛なしに会おうなどとは欠片も思わない。同じ青系統でもデイムロスとバルバトスではレンズ結晶とガラス玉くらいには価値が違う、というのがアトワイトの偽りない内心だつた。残念だが当然である。

己を徹底的に視界から排除しようとするアトワイトに黙礼し、中身超フツーな狂戦士は誰に問うでもなく口を開いた。

「それで？　俺はここで何を片付ければいいんだ？　全部か？」

いきなりの先制口撃に思わずデイムロスが吹き出し、カーレルが必死に頬の引き攣りを制御している横で、ハロルドがシレツと応える。「人体実験に決まつてんでしょ。あんた実験台、あたし実験者。兄さんが記録して、そこの青いバカツプルは万が一実験台が暴れ出したら

頭かち割つて止める役

「人体実験だあ？」

「そ、人体実験。ソーディアンへの人格投射のね。高密度レンズ製コアクリスタルへの人格投射理論と機器のプロトタイプは完成しているんだけど、肝心のデータがないわけ。だからデータ採取のために、ソーディアン・マスター候補筆頭と同レベルの戦闘力持ちで、なおかつ使い捨ててもコラテラル・ダメージの少ないあんたに白羽の矢を立てたのよ。

だいたい、ぶつけ本番で大惨事になつたら、あたしの才能が疑われるしね。それにしても、あんたみたいなのにソーディアン・マスターとしての能力がある可能性が高いなんて、世も末よね！」

もはや自称ではなく、彼女が説明の補足として黒板に書き込んだイラスト混じりの概略に目を走らせつつ、今現在既に疑つとるしお前みたいなあからさまにマツドな女に才能がある方が世も末だわ、という当人からすれば当然な反論を飲み込み、バルバトスは呻いた。つまり何か？　そのクソ怪しいコアクリスタルとやらに、俺の人格をコピーすると？

冗談ではなかつた。ただでさえ肉体に引っ張られ、人格的にはオリジナルのエミュレートどころか、リミッター付きのオリジナル相当にまで侵食されているのだ。かつてのような死にたくないがゆえに必死こいて本能の手綱を握るヘタレ（地上軍基準）ではなく、肉体を乗りこなし狂熱に指向性を持たせる、冷徹な意思のもとに暴威を振り撒く鉄血の破壊者が今の“中の人”である。突撃と破壊と蹂躪しか能のなかつたオリジナルより、ある意味ではタチが悪い。

これで下手に人格コピーなどやって、まかり間違つてどこに消えたかも定かでないオリジナルが転写でもされたら、最悪プロトタイプ・ソーディアンと肉体の同時侵食で暴走不可避である。ソーディアンのもたらす圧倒的スペックアップと狂乱した等身大の突撃する地上要塞の相乗により、天も地も等しく鎮圧に代償を払うこととなるだろう。群を凌駕する個という絶対的暴威による、死と瓦礫の山という代償を。

そんな嫌な未来予想図を胸に、内心狂戦士（ただし理性付き）が滂沱の汗を流すのをよそに、実験の準備は一分の遅滞もなく進みつつあった。何処からともなくどうやつて運び込んだのか、二人がかりで押す大型台車に載った人格投射用試作チャンバーが搬入され、固定されたそれに晶力伝導ケーブルがメドウーサの生え際のごとく、束になつて接続されていく。チャンバーに接続されたケーブルのうち、前面のソケットに例外的に挿し込まれた数本には、ちょうど黒板に“実物大”と銘打たれて描かれたコアクリスタルを、恐らく露出した部分の周囲ごと固定し覆うサイズのカバーとも固定具ともつかない、珍妙な機材が接続された。エネルギー供給を受けてか、脈打つよう光る晶力伝導ラインが実に不気味である。

チャンバーを搬入し姿を消したと思われた助手一号と二号のうち、絵に描いたような厚底ビンめいた分厚いレンズの丸メガネをかけた一号の方が、今度は一人用の台車を押してそそくさと現れた。その台車に載せられた固定台上のそれに目を向け、バルバトスは目を剥き、次いで慌てて背中に手をやつた。引き抜かれた背中の得物は当然無事だつたが、しかしそれならば眼前のアレは一体何なのだ？

『アーヴィングアボリックファン^{アーヴィング}』はウチの副部長が設計したものよ。寸分違わずコピーなんてできて当然つしょ。ま、プロトタイプ・ソーディアンとして機能を発揮できるように、コアクリスタルの接続やそれに伴う強度不足の解消、レンズエネルギー伝達のための回路構築とか色々弄つたから、細部は寸分違わずとは言えないけどね。目方増えてるし。

でもアレよね、斧なのにもの言う剣つてのもつまんないジョークね』

混乱する彼に親切にも説明を与えたのは、意外にもこの手の些^{ソーディアン}事を嫌う人間筆頭のハロルドだつた。まあ、彼女からすればさつきと人体実験に移りたかつたし、些^{ソーディアン}事を些^{ソーディアン}として丸投げる方が余計に予定が遅れると、渋々ながらも理解していたからなのだが。それにしても一言多いのは生来のサガだろうか。

チャンバーとプロトタイプ・ソーディアン『アボリックファン

グ改』^{地上軍のマッド筆頭}が人格伝達ホルダーで固定されたのを視界の片隅で捉えた

ハロルドが、右親指を背後に向けつつ「はよ_逝行け」と無言で催促する。さすがにデイムロスならソーディアン付きの己^{トウルーパー}でも殺し尽くしてくれるか、と変なところで納得した後天的狂戦士は、ままよ、とチャンバーに踏み入った。もっとも、当のデイムロス自身はというと。

——試作型ソーディアンを手にした上で暴走したバルバトスに、自分は勝てるのだろうか？

と、突撃兵の異名で名高い彼にしては珍しく、脳内でいさきか過剰にパワーアップさせたバルバトスと己^{トウルーパー}を戦わせつつ、あーでもないこーでもないと内心懊惱していたのだが。

が、バルバトスの（本人にとつては）悲壯な決意とデイムロスの躊躇とは裏腹に、人格投射実験はつつがなく始まった。問題は、人格投射前に行われるスキヤニング工程がほぼ終わらんとした時に顕在化した。

「ぐ、ぬッ……!?

チャンバー越しにくぐもつたバルバトスの呻きの直後、接続されたモニタリングデバイスを睨んでいたカーレルが戸惑った声を上げる。「ハロルド、フラットラインを示していた各種パラメータが、急に乱れ出したぞ。まさかとは思うが、こういう事態は想定のうちなのか？」どうせ自分が一から十まで手がけた実験だし成功するだろう、と明後日の方向を向いていたところを呼びつけられ、ちょっと見せて、と横から首を突っ込んだハロルドが驚きに目を見張った。それを見たカーレルが「珍しく驚きに表情を乱すハロルド、尊い……」と内心シスコン丸出しにほっこりし、それを隠してやはり想定外の事態か、とデイムロスに用意してくれと目を向けると同時に、コンソールを壊さんとする勢いで操作しながら、今度はマッドが呻いた。

「何よ、この数値。人格、ひいては魂の疑似的数値化定義とパラメータ検出理論が間違つてないのはあたしから当然としても、これじや人格が二つあるって言つてるようなものだわ。あいつ二重人格だつたわけ!?」

期せずしてある意味で正鶴を射たハロルドはさておき、チャンバー

内の我らがぶるあ魔人に視点を戻そう。彼が精神世界、ときおり熱く身を焦がす熱風の吹き荒れる廃墟の街において対峙していたものこそ、スキヤニング時に発せられた晶力波導により活性化した、かつてのオリジナル——その残滓であった。

「返せえ……それは俺の体だ、俺に返せええええ!!!」

デイアボリックファンジングを振り回し、凶相もあらわに襲いかかるオーリジナルに対し、『彼』もまた背の大戦斧を引き抜く。なるほどここは精神の座、己の望むことはある程度形になるらしい。試作型ソードイアンの代わりに台車に置いた愛斧が背中にあるのも、「それが己の背にあつて当たり前」という認識が具現化したのだろう。

——ならば好都合、己ごときへタレの異世界人に乗つ取られた拳句、残骸となり果てた分際でメソメソと精神の座にしがみつく間抜けを微塵に碎き散らし、二度と這い出してこれないよう完全滅殺してくれる！

「いいやかましいんだよこのクソ間抜け！ 肉体ひとつ御しきれんゴミクズが、バルバトス・ゲーティアを名乗ろうなんざ片腹痛いわア！！ 今日の俺は紳士的だからなあ、念入りに擦り潰して、貴様ごときが二度と余計な口を開けぬようにしてくれる——ありがたく死ねえええいッ！！」

咆哮一喝、ふたりの狂戦士が激しく切り結ぶ。互いの得物がぶつかり、衝撃波が虚空を搔き乱し、あるいは瓦礫を碎き散らして消えていく中、姿を同じくする異なる魂のデスマツチはより激しさを増していく——。

第5話

——魔人深層領域・獄炎伽藍都市

「ぶるああああああッ!!」「ぶるああああああッ!!」

吹きすさぶ熱風と伽藍の廃墟。他に見守るものとてない殺伐の死戦場で、激しく切り結ぶ二つの魂。鏡合わせの似姿に、限りなく相似するも決定的に異なる心。破壊衝動を全周囲に振り撒く狂乱の魔人と、冷徹な意志と手綱捌きでそれに指向性を付与する異端のマレビト。嫉妬と妄執の果てに裏切りと誅殺に沈んだ狂戦士と、侵食と同調の果てに桎梏を振りほどいた異界よりの魔人。鬪争と狂氣に身を焦がす生来の魔性と、それを受けてなお理性を保つ平和の国の潜在的アウトサイダー。なるほど、ある意味では姿と同じく、精神性も鏡合わせであるらしい。鏡写しのドツペルゲンガー、反転鏡像とはこのことか。

「たまたま迷い込んだだけのガキが、俺の体を乗っ取るとはいいで胸だ！ついでに啖呵も気に入つた、念入りに擦り潰して取り込んでやるよ。ありがたく思うんだなあ寄生虫がッ！」

「はッ、その寄生虫ごときに乗っ取られた拳句、メソメソとしがみついてるお方は言うことが違うじやねえか。だがな、晶力照射でようやく活性化できる程度の残骸風情が、ゴチャゴチャと吠えてんじやねえ！」

寄生虫呼ばわりに額に青筋をうねらせ、大戦斧の叩き落としにかち上げで応えるバルバトス。拮抗する剛力の正面衝突に、得物を逆方に弾き返された相似形の魔人が揃つて踏鞴を踏む。軽くふらつき、構える機を逸し、それでも敵に害を与えると互いに頭突きし合い、角突き合わせた態勢から、口撃はこちらのターンとばかりに魔人が吼えた。「さつきからよくもまあ口だけはペラペラと、滑らかに回るもんだな、ああ!? その轟さえずりと同じくらいには貴様の強さに期待してもいいんだろうなあ、ええ？ 全方位に暴れるしか脳のない、剛力無能のオリジナル様よおッ!!」

「…………よく言った。ブチ殺すッ!!」

弾かれたように突き飛ばし合い、構え、飛び込む。互いの右眼に“必”、左眼に“滅”の字を浮かび上がらせんばかりに殺意を漲らせ、己が愛斧にさらなる力を注ぎ込む。魔獣の乱撃と魔人の迎撃がぶつかり合い、引き裂かれた大気が啼き叫ぶ。踏み込みと鍔迫り合いの度に陥没する大地が軋み、周囲に土石の散弾を撒き散らす。正しくここは血戦場。

「ジエノサイドオオオオ……」「ジエノサイドオオオオ……」

再度叩きつけあつた斧頭が、まつたくの正面衝突により逆方へと圧し出される。互いにその余勢で飛び離れた魔人どもは、この一撃を終焉の一発にせんと、抹殺の意志を波動に変え、限界を越えてチャージした。

『ブレイバアアアアアツツツ!!』

必滅の意志を殺意の波動に託し、必殺の魔砲が解き放たれる。威力は互角、ゆえに衝突と均衡は必然であり、互いを越えんとする暴虐の希求は同様。

——しかし、極めて近く、限りなく遠い相似形であるがゆえに、均衡の崩壊は一瞬だった。

「バカな、ありえん……この俺が、バルバトス・ゲーティアが、こんな……こんな寄生虫ごときにツ!?」

弾かれ宙を舞う大戦斧。呆然とそれを見上げる己と、過去最高の踏み込みで正しく吶喊してきた敵手。瞬間の忘我が致命的な隙を生み、それを逃すほどバルバトスも奇特ではない。結果として、オリジナルは左肩から袈裟懸けに必滅の一撃を受け、袈裟斬りされた下半分を爆碎させながら地に投げ出されこととなつた。

弱体化しきつた残滓、それがたまさか晶力供給で復活しただけとは言え、腐つてもバルバトス・ゲーティアである。ならば、相応以上に強者である筈なのだ。だが、鏡像かドッペルゲンガーか何かのようにそつくりな見た目とは裏腹に、その内面の差は歴然としすぎていた。オリジナルの敗因はそこ以外になかつた。

ただひたすらに暴威を振り撒くことしか頭にない殺戮衝動の権化と、それに侵食され、同調してなお理性を保ち、乗りこなす者。全力

全壊で薙ぎ払うしかできず、野生の勘でのみ戦場を解析する者と、荒れ狂う衝動を捌き、狂奔する肉体に思考という鞭をくれ、透徹した理性のもとに滅殺の暴威を制御する者。そもそも弱者を蹂躪することに悦を得る者と、闘争そのものを永劫に求めんとする者。死を恐れるがゆえに同等の強者を認められなかつた者と、死を恐れ、正面からその意を受け止めたがゆえに“ならば死ぬまで闘争を享受すればいい、後事なぞ知つたことか”とアカン方向にキマつてしまつた者。長々と述べたが、端的に言えば成長過程で生まれた器の差である。

元来、魔人は生まれながらの戦士であつた。最強を名乗るに値する才があつた。無敵を豪語するにふさわしいそれが。正しく振るわれれば、勇者として喝采を浴びるほどに輝いて。

しかし、彼に比肩するだけの才が周囲に居なかつたこと、彼の増長を止められるだけの存在が居なかつたことが、その運命を決定的に歪めた。肥大化する自我はファイジカルスペックを超える技量の研鑽を“弱者の手遊び”と嘲笑い、ただ本能のままに豪腕を振るう。なるほど、強力である。だが、所詮は獸のそれに等しいのであれば、制御された暴力こそが至高の軍においては、評価など望むべくもなかつた。ゆえに、大いなる格下殺し。だからこそ、破壊衝動を抑制できぬ狂犬という屈辱の評価。いくら戦果を挙げようと、制御も統率も不可能なのであれば、それは評価するに足るものとはならない。いつしか鬱屈は傲慢に、純粹だつた筈の闘争心は格下を^{てんりく}殄戮する快樂にとつて変わり、そして承認欲求は永遠に満たされぬ英雄願望へ。かくして性衝動と破壊本能と殺戮衝動の混濁した、団体ばかり大きい可哀相な童貞坊やは、裏切りの魔人への道を順調に進みつつあつた。

団体とは裏腹に脆い精神を対アトワイト被瞬殺記録更新でズタズタにされ、代償行為をと願つた出撃許可も与えられず、自棄酒呷つて不貞寝という最高のタイミングで、異界より飛来した魂に弾き飛ばされ、靈的衝撃で擦り潰されなければ。

翻つて、“彼”はどこまでも平凡な男だつた。平和の国に生まれ、育ち、そして死ぬことが確定していた男にとつて、己の成績を学歴と

いう形で示す戦いはともかく、物理的な闘争など想像の壇外に過ぎなかつた。

だからこそ、わからない。なぜ、己は異国よりの紛争の報せに心躍らせるのか？ なぜ、己はこんなにも言い知れぬ飢餓感を覚えるのか？ なぜ、己の肉体はこんなにも脆いのか——なぜ？ なぜ？ なぜ？

ゆえにこそ、天地戦争という驚天動地の異界戦争なしに、どこまでも平凡なスペックしか持ち得なかつた“彼”唯一の異質は目覚めず、そして何の因果かこの地でそれを発揮する最良の肉体を得た。得てしまつた。そして戦いの渦中で、肉体と意識の求めるものが真の意味で合一した時、“彼”的無意識の自覚は解き放たれたのだつた。

嗚呼、こここそが俺の、俺のための――

言い知れぬ生来の飢餓を耐え抜いた強靭な自制。それをおくびにも出さず平凡を偽り通した自律。そしてそれらを完璧に統御してのけた意志と理性。その身に見合わぬ本能のみが生まれつき肥大化したがゆえに、その制御に全身全霊を捧げた、平和の國のアウトサイダー。それこそが“彼”的正体であり、その持つすべてがバルバトス・ゲーティアに本来なければならず、そして致命的に欠けていたものである。欠けたピースを埋めなかつた者と埋めた者。勝敗は必然でしかなかつた。

唯一残つた右腕で上体を支え、恨みがましく己を見るオリジナル。まさかここまで見苦しい男だとは思つていなかつた“彼”は、二重の意味でとどめを刺すべく口を開く。

「寄生虫の一撃のお味はいかがかな、オリジナル？ ま、所詮貴様はアトワイト女の尻を追い回すので満足しているヘタレチエリー、女を抱く度胸もなければ金もないときた。そんなどこに出しても恥ずかしい童貞坊やに負ける道理なぞ、この俺が持つはずないわなあ……ククツ、クハツ、クカカツ、クアツハハハハハ！」

じやあな、可哀想なバルバトス坊や！ 来世で呪いの装備を外せることを、老婆心ながら祈つておいてやるよ！」

咲笑とともに振り下ろされた『ディアボリックファング』が、屈辱と憎悪に染まりきつたオリジナルの残滓の顔面を完膚なきまでに擊碎する。残滓の残滓すら余さず爆散したのを見届けると、『彼』は鼻を鳴らし天を仰いだ。いつしか熱風は止み、業火に焼かれていた天に日が昇りつつある。もはや異物と化したかつての主を下したために、覚醒が始まつたらしい。もはやこの場を訪れるこどもなかろう。

「あばよ、オリジナル——」

吐き捨てた直後、中天より光が降り注ぐ。目覚めの光を全身に浴びつつ、バルバトスの意識は暫し途絶えた。

一方、地上軍総司令部・技術本部第二兵装実験室。想定値を超える晶力を吸い込みつつも沈黙したチャンバーを前に、パーソナルパターンの乱れを解析したハロルドが真相に近づきつつあつた。あくまで近づきつつあるだけで、『異界よりの憑依者』なるSAN値を銀の鍵の門の彼方に投げ捨てた結論は永遠に導き出せないにせよ、それ以外は概ね正しいと言つても過言ではないだろう。さすがは地上軍の誇……つていいのか甚だ疑問だが、とにかく超級の

マッドサイエンティストだけはある。

「要するにね、こいつの人格はある時を境に入れ替わったのよ」

ハロルドの出した結論とは、精神の奥底に封じられた人格の叛乱というものがだつた。彼女は語る。かつて封じられていた副人格が、何らかの理由で縛鎖の緩んだ隙に主人格を追い落としたのだ、と。かつて封じられていた副人格を、異界から飛来した憑依者に置き換えればだいたい合つている。

そして、その追い落とされた旧主人格が反逆を試みたのが、あのパーソナルパターンの乱れなのだ、とも。数分間せめぎ合うようにそのパラメータを乱れさせていたふたつのパターンのうち、ある時を境に片方だけが消失した。これが意味するものは――

「現行の主人格が勝つたのなら問題はないのよ。あいつは少なくとも話の通じるキチガイらしいし。でも、旧主人格は違うんでしょ?」

「ああ、色々と酷かつた。だからこそ、今のバルバースは信頼に足ると思えるんだが……仮にかつての状態に戻つたら、どうなることか」

「デイムロスの問いに、ハロルドはややズレた無情な答えを返した。

「人格のスキヤニングとプロトタイプへの投射は既に終わつてゐるわ。問題は、投射された方——つまりチャンバーから出て来たあいつがまともなキチガイかイカれたキチガイか、こつちじや判別できないってところね」

「もしも制御できない方だつたら?」

カーレルの呟きに、デイムロスが顔色を微かに失いながら応えた。地上軍の全施設が地上から消えるだろうな。そして、その予想は恐らく正しい。

“彼”が散々に抜き下ろしたとは言え、この世界において上から數えた方が確実に早い程度には強者だつたのが、オリジナル・バルバースである。そこにソーディアンのスペックブーストが加われば、それくらいはしてのけるだろう。ソーディアンを持った己をデイムロスなら殺し尽くすと確信したバルバース同様、デイムロスも彼に対し変な確信を持つていた。奴なら絶対に殺る、と。

ここまで無言を貫いているバルバース絡みの話題に絶対入らないウーマン・アトワイトを除く三人が、じつと視線をチャンバーに突き刺す。どちらが出て来る? 狂戦士(キチガイ)か、それとも狂戦士(リミッター付)か?

静寂を破つたのは、チャンバー内被験者の意識覚醒を告げるコンソールからのシグナルだつた。各種パラメータをチェックしたハロルドが、デイムロスと兄に視線を向け、領きが返つたのを見計らつて幾つかトグルスイッチを弾き、左端のレバーを手前に倒す。気の抜けるようなBEEP音とともにチャンバーのロックが外れ、スライドドアがチャンバー内にこもつた熱気を外界に吐き出す。吐息とも呻きともつかぬものを漏らしながら、バルバースがまろび出た。

「ぬ、ぐう……まつたく、なかなかの熱烈歓迎じゃねえか。まさかあんなもんに今さら出くわすとはなあ」

首をゴキゴキと鳴らし、片膝の態勢からわずかにふらつきつつ、左

手で顔を覆った狂戦士が立ち上がる。三人を庇うように愛剣の柄にさりげなく手をかけたデイムロスが、青い魔人に問いかけた。

——バルバトス。お前は、どっちだ？

左手を下ろし、デイムロスに視線を向けつつ、男はきよとんと両眼を瞬かせた。和やかに話す、混乱してマツドサイエンティストをつまみ上げるのに続き、狂戦士レア行動集第三弾である。

が、己の危惧されているところを遅れながらに理解したのか、今度は右手で顔を覆いながら爆笑した。のけぞり過ぎて色々と愉快な体勢になつているが、些細なことか。

「くッ、くはッ、ぶふッ、ゲエハハハハハハッ！ わ、笑わせるんじやねえよデイムロス、こちとら寝起きだつてのに、くくく、ぶはッ、キヒツ、ヒイハハハハハハッ！」

くはッ、かはッ、ぜ、ハア……ッ、どつちかだとお？ 隨分と情けねえこと言つてくれるじやねえか、デイムロスよお？ 僕があの、どこに出しても恥ずかしい、童貞こじらせたバルバトス坊やに負けるつてかア!? 寝起きにかますにや冗談キツいぜ、おい』

盛大に爆笑されてきまり悪げに頬を搔きつつ、デイムロスは爆笑する強面筋肉魔人にドン引きする三人に振り返つた。間違いないくともな方リミッター搭載仕様だという確信があつた。彼の知るブレー初期型キバトル＆知性撤去仕様に、こんなフレンドリーな応対は不可能だからだ。インテル入つてもブレーアトワイトキ撤去は変わつてないとか言つてはいけない。

——それはそれとして。

「お前、え、本当に!?」

今度はデイムロス（と後方のカーレル）が笑撃に悶える番だつた。あの強面ガチムチバーサーカーの口から「誰が童貞坊やになんざ負けるか」などというパワーワードが飛び出してきたのだ、さもありなん。「おうよ。我が愛すべきオリジナル様はな、童貞こじらせた拳句女神様アトワイトにしつこくコナかけて玉碎を繰り返し、自棄酒して不貞寝したところを俺に居場所を奪われた、何とも可哀想な男というわけだ。笑つてやれ、俺が愉しい」

バルバトスの口から語られたのはなんとも言い難い、しかし彼を知る者からすれば腹筋にエクスプロード直撃不可避の、あまりに情けない内実だった。それを思い出し笑いに頬をヒクつかせながら赤裸々に語るバルバトスも、大概外道である。

——で、ベルセリオス妹が危惧してんのは、イカれた能なしのオリジナル様が再浮上するかどうかだろ？ その間に領くハロルド以下三人——やはりアトワイトは話に参加する気がなかつた——に、魔人は語る。

「まず俺が理解したのは、目が覚めたら、というかこの体で覚醒した時には、既にこの体を乗つ取つていた、ってことだ。それ以前に俺自身の記憶の連續性はない。奪つた体の方の記憶はともかくな。

で、だ。どうも覚醒前の寝ボケた俺が、浮上時に奴の精神だか魂だかに特攻かましらしくてな？」 哀れオリジナルの人格は碎け散つ

て消失し、その破片とも呼べん残滓が精神の座にしがみついてたんだが、それがスキヤニングの際に浴びた晶力を糧に活性化したわけよ。

そいつと一戦交えて、完膚なきまでに爆発四散させてきた。ま、次は絶対にねえよ」

「ふーん、それで二人分のパーソナルパターンが検出されてたわけか。でも、同じバーサーカーって割には、随分と波形に差があつたわよ？ 片方は荒れ狂う大波か見境なく暴れまわるモンスター、でももう片方には必要なときにだけ巨大な力を吐き出す、知性の片鱗があつたわ。やっぱりあんたは後者ね、話が通じる時点で前者じやありえないわ」

——童貞と破壊衝動と英雄願望こじらせた奴と一緒にされてもなあ……

バルバトスの内心はこの一文に尽きた。なお、『彼』自身も憑依前後ともに素人童貞なのは永遠の秘密である。風俗嬢と素人で性差あるのかよニユーハーフかオラア！？ という一部の熱い主張は置いておく。

ともあれ、彼にとつて最優先すべきは武具の馴らしだ。重心の変位、晶術ブースターとしての増幅具合、武器そのものとしての破壊力

等々、実戦投入前に確認せねばならないことは山のようにある。何より、大戦斧の二刀流を早くモノにしなければならなかつた。片手で殴り合いつつ片手で晶術ぶつぱ。その有用性がわかるがゆえに、テンション爆上げ不可避である。説明や能書きはどうでもいい、そんなことより実働試験はよ。

ソーディアン初回起動時の人格コンフリクトの危険性等について珍しく真剣に説明しているのをガン無視し、ハロルドに一瞥くれて試作兵^{ディアボリックファンク改}装をチャンバーから外した魔人は、それを片手に背に愛斧を戻し、さつさと退室するべく踵を返した。どう考へても、今の己の全力にこの部屋が耐えられるとは思えない。となれば、最速で外に出て演習場を貸し切り——当然先客がいるなら追い出す。死人が出ないようにするにはそれ以外あるまい、常識的に考へて——一切の後顧の憂いなく全力ぶっぱ三昧を堪能する必要がある。

「試し撃ちするからデータ採取したいならさつさと来い、俺は演習場の貸し切り申請を出してくる」

ぶつきらぼうにそう告げて足音高く退室するバルバトスからは、新たに入手した武具の試しを行うときの武人特有の妖しくも猛々しいオーラめいたものが立ち上つていた。

それを聞いて弾かれたように顔を上げた天災マッドも、そこらからメモパッドと筆記具やその他データ採取用のフィールドワークキットをひつ掴み、戦闘狂の後を追つて飛び出す。その背中から、マッドに属する者が実験の際に漏らす、怪しい笑みとオーラのような何かがドップラー効果めいて尾を引いた。

「くくッ、くふッ、クククツ——クアツハハハハハハハハ!!」「にゅふ、にゅふつ、にゅふふふふふふふふ……」

後世にて、半ば外典めいた扱いを受けた名もなき軍人の回顧録に曰く。その日、同時多発的に発生したバーサーカーとマッドの笑みにより、少なくない者、特にリトラー総司令が胃痛を訴え、閉め切られた演習場から幾度となく立ち上るド派手なきのこ雲に白目を剥いてS A N 値チェックを余儀なくされたという。

第6話

バルバトス・ゲーティアが試作型ソーデイアンへの人格投射実験に参加してから、おおよそ二ヶ月が過ぎた。この二ヶ月という期間のうち、実際に四十日もの期間がコアクリスタルの製造に費やされている。地上の設備が空中都市群にどうしようもなく劣るという要因もあるにはあつたが、それを抜きにしても高密度レンズ集積結晶の精製には物資・時間を問わず、莫大なコストが要求されるのだ。

その間、地上軍は総力を結集して支部組織を使い漬しながら陽動と牽制を続け、まさに蛸が己の足を喰つて生き永らえるが如く、なんとか中枢戦力を維持しつつもソーデイアン計画の秘匿と完遂に成功する。まさに組織的奇跡の親戚であつた。

この二ヶ月の間、バルバトスは単独での戦線維持やコマンドを率いての敵突出部隊への強襲などで戦場を駆け回り、プロトソーデイアン・バルバトスとの連携練度を高めていった。今なら単身敵拠点を強襲殲滅できる気がする、割と本気で——とは本人の弁である。誰もそこまでやれとは言つてない、と胃を抑えつつそれに返したのは地上軍総司令——メルクリウス・リトラーだつた。最強の戦略家を胃痛粹に貶める男、バルバトス。色々な意味で傍迷惑な奴であつた。

さて、ソーデイアン計画の完遂がなつたとは言え、その慣熟訓練は未だ終わっていない。人格投射してはい実戦、と言うわけにはいかないのだ。一心同体ならぬ剣身同心ではあるが、最低限連携できなければ宝の持ち腐れである。まあ、多少マスターとソーデイアンの連携がまずかろうと、超級の局地戦術兵器であることに疑いの余地はないのだが。

これまで言及されてきたソーデイアン計画の要諦は、局地戦術級インテリジエンス・ウェポン『ソーデイアン』の集中運用により敵中枢たる第一空中都市^{ダ・イ・ク・ロ・フ・ト}を強襲、拠点奥深くに隠る自称天^{ミ・ク・ト・ラ}王を撃破。その独裁に依拠する敵指揮系統を擊碎し、地上軍に有利な形での早期決着を図るというものだつた。

もとより技術力の絶対的格差や絶対制空権の喪失から、早期決着以

外に地上軍に残された道はなかつたわけだが、ソーディアン計画実行に伴う陽動と牽制がそれに拍車をかけた。当然の話だ、ただでさえマンパワー以外でほとんど劣る地上軍が、そのマンパワーを使い潰して陽動となしたのだから。もはや地上軍統合本部中枢兼超巨大輸送艦『ラディスロウ』の再浮上シーケンスを急ぎ、それをもつて敵中枢へ殴り込むこと以外に地上軍の目は向いていなかつた。

話を戻そう。その慣熟訓練の仮想敵として、我らが青い狂戦士が抜擢されたわけである。敵も早晚ソーディアン類似兵器の発案と開発に取りかかるだろう、という情報部の提言に基き、『ソーディアン・チーム』の慣熟と戦術構築は焦眉の急とされた。ゆえにこそ、彼らを除けば地上軍最強にして問答無用に地上軍最凶なバルバトスをアグレッサーに、実戦よりも過酷な訓練を行う必要があつたのである。

一部からは「地上軍最強の単独遊撃破城槌を戦線離脱させて大丈夫か?」という懸念も出たが、これにはふたつの要因から問題なかろう、という結論が出された。

ひとつは、天上軍の戦略目標のために戦略級無差別地殻破砕砲の発動が制限されたこと。ただでさえ気候変動とベルクラント乱射で雪が降りやすい地方に身を潜める地上軍主力だつたが、近年は拠点周囲に商業区を構え、さあ撃つてみろと言わんばかりの大膽な態度に出ていた。ラディスロウの主動力炉を周辺地域の発電プラント用スターターにすべく、艦体の下半分を埋設するほどであるから恐ろしい。ベルクラントが撃たれれば即試合終了、敵チーム不在によりコールドゲーム成立不可避といつたところか。だが天上軍は撃つことを許されない。撃とうものなら短期的には地上軍主軸消滅で天上軍大勝利だが、中長期的には干上がつて試合終了待つたなしなのだ。

その理由こそ、『緒戦でベルクラント撃ち過ぎ問題』という身も蓋もない、そしてド阿呆極まる天上軍の惱^{自業自得}みだつた。何の事はない、地上市を消し飛ばし過ぎて地上人が各大陸に逃げ散り、少数で隠れ潜むようになり、さらに空中都市群直下に立ち籠める暗雲が光学観測網をシャットアウトするため、天空からの捕捉能力が極度に悪化。戦後を見据えた下層労働階級^労_{奴隸}従事者の確保スケジュールが不透明になつ

てしまつたのだ。これにはミクトランも、苦虫をグロス単位で噛み潰したような苦い顔をしたという。

なるほど、拠点を晒して挑発する地上軍本部は鬱陶しいことこの上ない。しかしそこに緒戦のように思考停止してベルクラントぶつぱしてしまえば、余波で周辺商業区も軒並み消し飛び、地殻ごと粉碎されて外殼大地の糧となつてしまふ。かと言つて無人機兵团で制圧をかけようにも、統合本部を守るのはディムロス・ティンバー率いる地上軍最精銳と名高い第一師団を筆頭に、ゲリラ戦のエキスパートたるイクティノス・マイナード、齢二十三にして天才軍師の評価を確立させたカーレル・ベルセリオス、初期の地上軍最高幹部であり今なお最強格の術士として健在のラヴィル・クレメンテと、綺羅星の如き人材が揃つてゐる。

そしてどどめに戦場で絶対遭遇したくない**蛮族筆頭**（地上人）こと我らの強力若本、プロトソーディアン装備後はひとり増強中隊からひとり二個増強中隊に倍増してパワー満点気力充実、高笑いしながら両斧から交互にジエノサイドブレイバーぶつぱして無人機一個師団を単独殲滅してのけたバルバトスと、その突撃について来れる愉快な配下たちである。これら数の暴力を狂つた質の暴力で覆す変態どもの前では、数の多寡などほとんど誤差に過ぎない。これが地方支部程度の標準戦力ならともかく、ベルクラントも駄目、数の暴力で駐屯戦力を引き剥がして制圧も無理となれば、苦々しく思いながらも放置するしかなかつたのだ。

ちなみに天上軍がなぜベルクラントを撃てないかバルバトスが知つた時、彼は文字通り腹筋が攣るほど爆笑して医務室に通うハメになつた。確かにアホらし過ぎて爆笑不可避な案件ではある。

そしてもうひとつは、当のバルバトスが生み出した戦況の一時的停滞だつた。二ヶ月に渡つて最小でも大隊規模の無人機部隊をダース単位で完全破壊し、そのついでに天上軍の無人機制御用小規模拠点も数ヶ所地図から消して回つたのだ。いくら天上軍が無人兵器のオペレーターや保守点検スタッフ程度しか地上に降ろしていないとは言えど、それが片つ端から拠点とともに塵ひとつ残さず消し飛び、そも

そもそも以前に地上勤務を左遷か処刑宣告程度にしか認識していない天上人である。士気がダダ下がりして、進撃だの補充要員降下だとやる余裕すら消し飛んでいたのだ。

恐るべし蛮族。まさに力こそパワー……なのだが、これだけやつても厭戦気運が空中都市に広がらないあたり、彼らに施されたアジと植え付けられた選民思想は大概洗脳の域だつたようである。もつとも、彼ら天上人の忠誠というか信仰は、もっぱら彼らが生み出した空中都市群とその動力源たる6m級超々高密度レンズ集積結晶『神の眼』に向けられており、彼らの長たるミクトランには向けられていないのが皮肉と言うべきか、間抜けな傀儡の王と嗤うべきなのか。

ともあれ、ソーディアン・チームの慣熟訓練である。バルバトスからしても、この地上軍きつての強者たちとの合法的な交戦機会は望外の幸運だつた。無人機をひと山幾らのスクラップ or 謎肉に転職させる簡単なお仕事が続き過ぎて、いい加減モチベーションが萎えていたのだ。ここで休暇でもとつて美味しいメシと広い風呂でリフレッシュを、と考えていたところにこれだから、天は彼を見捨てていなかつたらしい。思わずガツツポーズも出ようというものだ。

そんなわけでソーディアン・チームの近接戦闘連携演習に臨み、右手にプロトソー・ディアン、左手にディアボリックファング——もちろんソーディアン・チームのそれも含めて重量バランスや形状のみを完全再現、刃引きされた模擬戦用の低致死性仕様（殺傷力がないとは言つてない）だ——を握り、二刀流の手数とファイジカルスペックに物を言わせた暴風の如き乱撃でデイムロスと互角の戦いを繰り広げていた——この場合、大戦斧二刀流と長剣一振りで互角に渡り合うディムロスの方がおかしい——我らが歩くMAP兵器だったが、

「はああああッ！」

当然、ソーディアン・チームはデイムロスのみのワンマンアーミーではない。正面戦力に気を取られて周囲への警戒がやや散漫化したのを逆手に取り、地形の多少の取つ掛かりを捉えたアクロバティックな三次元機動で筋肉魔人の死角を取つたピエール・ド・シャルティエが、文字通り雷速と見紛う突進から惚れ惚れするような突きを放つ。

彼にしても、高速戦闘特化片刃剣^{シャールティエ}と同調を始めてから最も手応えのある一撃であり、有効打を与えたと信じて疑わない一刺だつた。

が、しかし。

「温いわ！ 死角取つたくらいで浮かれてんじやねえッ!!」

デイムロスに踏み込みながらローキック気味の回し蹴りを放つて後退させたバルバトスが、余勢のままにシャルティエに向き直り、左手から強烈なかち上げを繰り出す。そもそも敵包囲陣ど真ん中に殴り込んで全周囲に敵しかいない状況から、幾度となくその包囲を打通・寸断し友軍を連れて生還した男である。死角に敵がいるのは日常であり、それへの対処は最早本能レベルで肉体に染み込んでいるわけで、死角から殴つた程度で有効打になるはずがなかつた。周囲に意識を向けて当然、それを悟られずして当然な状況下でほぼ無傷の生還が日常の男を舐めてはいけない。

が、シャルティエもさるもの。伊達や醉狂でソードエイアン・マスターになつたわけではない。強烈な振り上げを風に揺れる柳の如くしなやかに躊しつつ、斧頭の刃のない箇所を的確に蹴り上げて宙を舞い、さらに斧の側面に回し蹴りをくれてバルバトスの体勢を崩しながら側面に回り込んでみせた。それに合わせて踏み込み斬りを繰り出すチームリーダーと鍔迫り合いに持ち込みつつ、狂戦士の咆哮が轟く。

「二手で駄目なら三方からつてかア？ 甘い、温い、足りねえんだよツ！ 轟炎斬！ 斬空断ツ!! からのおツ！ 灼熱のバアアンストライクツ!!」

左脇腹めがけてするりと走つた対多数撃乱邀撃特化重突剣^{シャーティエ}を纏つたディアボリックファングで叩き落とし、間髪入れず踏み込みながら逆袈裟に斬り上げたプロトソー^{ロード}ディアンが、同時に振り下ろされた多元万能迫撃長剣^{ムーム}と激しく火花を散らす。右後方から再度神速の突進突きを放とうとしたシャルティエに目もくれず、ソードエイアンに詠唱待機させていた中級爆炎晶術をそちらに解き放つ。演習モードで起動中のコアクリスタル間リンクルージによる晶術^{データ}送受信で加害半径を知り、瞬時にバックステップからバック宙を切つてチー

ム最年少の天才剣士が飛び離れる。

可及的速やかに全力で離れる。その選択はベターなものではあつたが、バック宙は拙いと言わざるを得ない。最低限、本当に最低限、バルバトスから目を離すべきではなかつた。

「戦場で強敵から目え離すたあ、舐めてんのか小僧ツ!!」

「しまつ……!?」

強引にデイムロスを押し切つたバルバトスが、咆哮とともにシャルティエに吶喊する。自身にのみ向けられた巨斧の破壊力に盛大に顔を引き攣らせ、青年は周囲に視線をさまよわせた。

周囲に足場——なし。そもそも一番近い壁や岩はバルバトスの向こう。

蹴り飛ばして方向転換できそうな飛散物——突進してくる狂戦士の後方にしかない！

着地——するより先に追いつかれるに決まつてる!!

ああ、終わつた。「諦めろ、試合終了だ」と脳内で囁くふくよかな白髪の老人を無視しつつ、せめても足搔いて味方の付け入る隙に繋げよう、防御姿勢をとるシャルティエ。しかしこの場合、相手が悪過ぎた。

「諦める暇があつたら攻めの方向で足搔け！　くよくよと縮こまつてんじやねええッ！」

いつそ呆れるほどに躊躇呵責ない突撃で追い着き、その余勢を存分に活かして横殴りに振るわれた右の大戦斧が、健気なガードを一切の抵抗も許さず擊碎し、インパクト直前でくるりと手の中で回転した斧の背が左脇腹を痛打する。完璧に手加減されたとシャルティエが痛感する間もなく、そのまま横薙ぎに吹き飛ばされた青年剣士は、痺れる右手を軽く振りながら叩き落されたソーディアンをひつそり回収しようと身を屈めかけた、イクティノスのみぞおち付近に右肩から直撃。揃つて昏倒という結果とあいなつた。

「さあ、これで一対一だ。お互い存分に全力で戦えるわけだが、まさか事ここに至つて否やはねえだろうなあ——デイムロオオオス!!」

満面の笑みを浮かべ、両斧を翼の如く翻し、踏み込みごとに後方に

土石を散弾めいて吹き飛ばしながら突撃するバルバトスに対し、地上軍最優にして最強の戦士も、戦意と闘志に溢れた笑みを浮かべ剣を構え直し、右脇にソーディアンを構えて吶喊姿勢をとった。

「ソーディアン・マスターとしての現状の経験差はともかく、今までの模擬戦績は俺の勝ち越しだぞ？　まさか忘れたとは言わせん——バルバトスッ!!」

突進、剛断、斬岩、激突。バルバトスは己の越えるべき壁を今こそ打ち破れるかもという可能性に猛り、デイムロスは己の全力を受け止めてなお、真っ向から殴り合える唯一の相手との久々のタイマンに心躍らせ。互いに全力で戦い合える喜びに哄笑しつつ、ふたりの危険過ぎるバトルワルツはその後二時間に渡つて上演された。

なお、バルバトスはこの演習で対デイムロス累計敗戦数をひとつ増やし、ノリノリで戦い過ぎてまたも演習場を更地にした咎でデイムロスとともに正座させられ、そろそろ胃薬が効きづらくなつてきたりトレーニングに説教されるというオチがついた。

「だから！　あれほど演習場を使う際には周囲への被害に気を配れと何度も言つただろう!?　デイムロス、君もだ！　久々に全力で戦えるからつて、君までノリノリで演習場を破壊してどうする!?　彼がプロトソーディアンの実働試験で更地にしてから、まだたつたの二ヶ月だぞ!?

こら！　ゲーティア中佐！　足を崩すな！　まだ私の話は終わっていないぞ！　いい加減叱責パターンが108を越えそうなのだが、君はいつになつたら自重というものをだな……!!

次、そこ！　デイムロス！　自分に怒りが向いてないからつて指差して笑うんじゃない！　君にも言いたいことは山ほどあるぞ！　だいたいだな、いい年と階級なんだからいい加減指揮官先頭突撃という無茶をやめろとあれほど前から言つてるのに君という奴はだな……！」

日頃の胃痛と鬱憤を全力開放する剣幕のリトラーにはさすがに逆

らえず、いい年こいたバトルマニアコンビは部下の手助けなしで、さながら月面のようにクレーターの海と化した演習場をふたりして均す罰を与えられることとなつた。

「なあ、バルバトス……」

「あん? 喋つてる暇があつたら手え動かせ。まだ四割弱も終わつてねえぞ」

「……次からは、自重するか」

「次までにお互い覚えてたらな……」

「何だか、前にもこんな事を言つたような気がするんだが……」

「奇遇だな、俺もだ。まあ、覚えてたらこんな事にはならんわな」

「……まつたくだ」

——ハア……。揃つてため息を吐き、のろのろと手押し車にシャベルで土を放り込みながら、いい年こいた馬鹿ふたりの嘆きが夜天に消えた。

『どうしてこうなつた……』

この馬鹿どもはいい加減自重を覚えるべきである。

高出力レンズ高圧縮集積結晶を核とする局地戦^{ソーディ}術決戦^ア兵装開発計画が、地上軍統合本部からの最優先戦略として正式に発令されて二ヶ月。ソーディアン・チームとして召集された面々が人格投射をつつがなく終え、地上軍でトータルスペックが最も自称^{ミクトラン}天王に近い男を仮想敵^{アグレッサー}に戦術連携演習を開始してからさらに一ヶ月。都合三ヶ月の間、関係者が胃壁とSAN値を削り、そして主にバルバトスとデイムロスが物理的に地形を削りながら、ついにソーディアン・プロジェクトは最終局面を迎えた。

演習の最終段階として、天上軍拠点で唯一天上人の戦闘部隊を有する基地を強襲・撃滅したことで、天上軍指導部にも地上軍の切り札の存在が露呈した可能性が高い。それそのものは許容されるべきリスクではあつたし、敵が類似兵器を実用化・量産する前に速攻をかけるのは当初からの想定である。

そういう意味では、ソーディアン・チームの演習完了とほぼ時を置かずして、巨大航空輸送艦『ラディスロウ』の船体発掘が完了したのは望外の幸運だった。周辺区画用発電プラントの発動機^{スターク}としての役割を終えて埋設していた船体下半部を、想定をはるかに超える速度で風雨の下に戻した功労者こそ、これまで関係者の胃壁にヤスリがけしていた例のアレ^{バルバトス}だつた。戦装束を作業服に着替え、首もとにタオルを引っ掛け、大戦斧をシャベルやツルハシに持ち替えて豪腕を振るい、ときおりタオルでガシガシと首筋や顔の汗を拭う姿は、どこからどう見ても土方の親方にしか見えなかつた。あまりに似合い過ぎて通りがかつたデイムロスが爆笑し、ツルハシとシャベルの二刀流を振りかぶつた若本土方スペシャルにデイムロスが追い回される事案が発生したくらいである。

さて、本人としては極めてシリアルスでありながら、ギャップと似合いつぶりで腹筋に三連殺をかます強力若本はさておき、ラディスロウの船体発掘と並行して進められていた強襲特装艦への改修計画策定も、概ね雛型の完成を見ようとしていた。元々のサイズゆえにタフネ

スという点では十分なものを持つとはいえるが、第一空中都市への吶喊を敢行するには不十分に過ぎる。輸送艦に戦闘艦ほどの装甲や損傷復旧／最小化設備は不要であり、戦闘艦の護衛を受けながら物資輸送を行うのが、そもそも輸送艦の本分だからである。

だが、地上軍に残された唯一の中規模以上航空艦がラディスロウのみであるとなると、話は変わってくる。これしかないのだから、これを目的に合うよう改修するしかないのだ。戦後の運用を考慮して輸送能力の減少を抑えつつ、速度と防御力を限界まで強化し、さらにダイクロフトの底部装甲を貫通せしめる突破力までも付与せねばならないのである。いくらハロルド・ベルセリオスと亡命科学者陣が人知の限界に挑む超天災と天才の群でも、さすがに取つ掛かりもなしにこれが解決するのは無理難題に過ぎた。

動力炉の中核を担う大型レンズ集積出力機の過半出力を用い、攻性晶力力場で艦体を防護。艦首に組み込んだ吶喊衝角にフィールドを収束させ、ダイクロフトに突撃する……というところまではつつがなく進んだが、問題はそこからだつた。どうあがいても、ダイクロフト底面を貫通し、有人稼働区画までの活路を拓くだけの突破力を見出だせなかつたのだ。出力配分をフィールドにもつと回せば突撃力になつてしまえば、ダイクロフトに辿り着くことすらできなくなる。

この難題に“取つ掛かり”を与えた——つまりは発想のブレイクスルーをもたらしたのもまた、我らが筋肉魔人であつた。たまたまプロト・ソードイアンの定期メンテナンスを受けに技術本部へ赴いたバルバトスと、“脳筋だしどうせ役に立つまいがストレス解消にはなるか”と軽い気持ちで意見交換することにしたハロルドにしても、まさか全身全霊を戦闘に特化した男に建設的な案が出せるとは思つていなかつた。

が、忘れてはならないのは、艦対都市とはいえる戦闘は戦闘であるし、こと戦闘といふ一種の破壊行為にかけて、人類でバルバトス・ゲーティアほど習熟している存在はまづいない。しかも、そこに異世界製の人格が組み込まれているとあれば尚更である。彼の戦闘に特化し

た頭脳と異界の思想・思考形式が結合した、極めて特異な神經電位の統合集積体は、この星に住まう人類であればまず思いつかない、ひどく奇抜な解決法を見出した。

ただ突撃するだけでは足りないのなら、突撃の威力を高めるためのちよつとしたスペースを加えればいい。そしてこの星には、彼の知るそのスペースの基となる機器が存在しなかつた。厳密に言えばあるにはあつたが、動力化される前に廃れてしまつた。そんな非効率的で原始的なものより、収束光条体を用いた高熱溶融掘削——要するにレーザー掘削の方が、同じだけの出力を必要とするなら省スペースかつ高性能だからだ。ましてやレンズという、星海からの贈り物があるのだ。機械式掘削が駆逐されたのも、ある意味では必然と言えよう。

そんな理由で開発者達の脳裏を過ることすらなかつた、その忘れ去られた機器を用いた発想——すなわち、回転である。ラムで足りないのであれば、ラムを回転穿孔衝角ドリル・ラムにすればいいのだ。これがただのドリルであれば、ダイクロフトとの接触・穿孔開始からそう経たぬうちに接触摩擦により停止し、固定されたドリルユニットの代わりに船体が振り回される醜態を晒すだろう。

しかし、ラデイスロウに増設予定の艦首衝角は、攻性フィールドを纏う非接触型である。ドリルユニットの接触・摩擦干渉による穿孔停止と、その後の反作用で起こる船体の反動回転は起こり得ない。フィールドの流動をドリルの回転と同期させれば、力場のうねりが刃となり、さらに捻転作用で収束度を高めたエネルギーの渦が都市底面装甲に多大な損傷を与え、もつて貫徹させるだけの威力をもたらすことは確実だ。

これだけの閃きを超天災に与えた青い筋の放つた言は、たつた一言。

「衝角を回しや済むだろ？」

たつたこれだけだつた。もつとも、語尾に“天才が雁首揃えて唸つてるかと思えば、んなことも思いつかなかつたのか”という、彼らしからぬ毒舌が付いていたのだが、この辺りは世界間の技術発展経緯、ひいてはレンズとの邂逅という絶対差異が存在するのだから、両世界

の存在を知るバルバトスにしか思いつけない発想である。思いつけなかつたのを貶すのはさすがに傲慢といえよう。

この単純明快極まりない回答に対し、当初のハロルドの反応は緩慢極まりないものだった。鼓膜を震わせ脳に届いた言に対し、オウム返しに呟くのみであつたのだから、どうやら彼女にとつては回答があつたこと、それそのものが想定外であるらしかつた。

しかし、驚愕からひとたび復帰すれば、彼女の思考は正しく雷速で解決策を見出した。神経網の跳躍伝導機構と電気・化学の両シナプスが悲鳴をあげながら、神経電位とカルシウムイオンを人体の限界を超える速度と量で移動し思考を加速せしめ、爆発的に分泌された脳内麻薬が神経が悲鳴代わりに放つ痛みを抑え込みつつ、さらなる高みへと中枢神経を超過駆動させる。限界の限界を超えた超々超過駆動の代償として、いわゆる誤用であるところの知恵熱にも似た発熱を覚えつつも、彼女の正しく規格外な処理速度と発想を併せ持つ思考回路は、バルバトスが意図した以上の結果をマイクロ秒にも満たぬ超速で導き出してみせた。

その結果。

「いやー、だめもとで話を向けてみるもんね！　まさかあんたみたいなウルトラ級の脳筋から最善手が飛び込んでくるとか、思つてもみなかつたわ！　あつはっは！！」

一見矮躯チラと見紛う、その実起伏タグの激しい女体マ」が強面と敵軍の残骸への転職勧告（強制）で名高い地獄マツツクから這い出た筋肉魔人に飛びつき、高笑いしながらヘッドロックをかましてつむじの辺りをバシバシとシバキ倒す、という笑劇の光景がそこになつた。主に一部の人間からしたら衝撃を通り越してS A N 値直葬ものの光景なのだが、それはさておき。

「ええい、鬱陶しいッ。放さんかハロルド！　俺は貴様の玩具ではない！」

色々な意味で限界を試されつつある自制心を総動員しつつ、できる限り紳士的にハロルドをひつぺがしていつぞやのようにつまみ上げ、バルバトスは心底うんざりした体で盛大に溜息を吐いた。まつたく

この女ときたら、自分の肢体が相応以上に破壊力を持つことを知らな
いらしい。でなければ、あんな無頓着な格好や言動などするものか。
目許の隈隱しの厚化粧や梳かすことすらしない寝癖をどうにかすれば——ついでに不規則過ぎる生活サイクルを正常化して隈を消せば、
これで誰もが振り向く美女になるというのだから、世の中わからぬ
ものだ。少なくとも、人類に資質を与える担当の神は相当に不公平で
あるらしい。

放せ下ろせヒジタバタ暴れる小柄な超天才の、傍から見て下着を着
けているのか不安になるレベルで揺れ動くふたつの瑞々しい果実に
吸い寄せられそうになる、ともすれば己が内心感じている欲情を剥き
出しにせんとする視線を鋼の如き自律心で強いて遠ざけながら、バル
バトスは再度溜息を吐いた。もつとも、その意味合いは初めのそれと
は違ひ、己のいろいろな意味での欲動の強さへの呆れだつたのだが。
色を知る年でもあるまいが、魔法使いD.T.歴32年の呪いから解き放たれたカタル
シスは伊達ではないのだろう。たぶん、おそらく、きっと。

ここにいつぞやのようにシスコンカ一大軍師ブルがいれば、韋駄天顔負けの
速度と仁王もかくやの形相で突撃・特攻・呐喊しただろうが、あいに
くここにはマッドと狂戦士のS.A.N値直葬コンビしかいない。被害
者がほぼ出ないのが救いではある——今のところ、バルバトスの理性
以外には。

いきなり手近のデスクに下ろされ、手荷物か大猫よろしく扱われた
こと——『平時今日の俺は（常に）紳士的だ』をモットーとする現在のバル
バトスからすれば、少々紳士的とは言い難い——にぶーぶー不平を
たれつつ、艦首増設衝角の再設計案を書き殴るハロルドもまた、己の
知性でも評価・客観化しきれない奇妙な情動——要するにバルバトス
への執着に、内心首を傾げていた。

その執着がどこから来るものなのか。あの男の何に対するものな
のか。最初は単に、デイムロスと互角に殴り合える頭のおかしいバー
サーカーとしか認識していなかったのが、どうしてこうも執着するの
か？

そもそも、彼女をして衝動的にアレを押し倒し、子を仕込めと迫ら

せる執着という時点で大概である。彼女は当人としては可能な限り、冷静かつ理性的に装つて“地上軍最高の頭脳と最凶の武を融合させるという実験”という建前を強調したが、当の魔人若本が“戦争が終わるまでは子作りなんぞする気はないし、戦後に自分の居場所など存在しない。己の相手を寡婦や母子家庭にするなど俺の矜持が許さん”と拒み、互いの腹に収めたことでなかつたことにはなつた。その後数日奇妙にギクシャクしたので、一応、ではあるが。

後付とはいえ、バルバトスとの間に生まれる子の資質に、生物学的、あるいは遺伝学的形質発現の面から見て興味をそそられたのは間違いないなかつたが、その発端が己にも制御できない衝動という点が、ハロルドにとつてはそれなり以上に屈辱だつた。彼女の突発的なMAD行動は、彼女なりの理論武装と自律によつて制御されていたからだ。それが傍目にニトロチャージャー全開ブレーキ全壊にしか見えないのが、残念でもなんでもなく当然なのは事実としても。自分の持ち得ないものを持つ者への某かの感情が働いているのだろう、というところまではハロルドにも容易に理解できだが、しかしそれはそれとして、衝動のままに痴女い迫り方をするとか黒歴史よね、という反省とささやかな悔恨、ついでに特大の羞恥を覚える程度には彼女も女性によしょうだった。

そんなアレコレを思い出したか、微妙にピンクがかつた気まずさを覚えつつあつた両者だが、半刻ほど続いた無言と退出の機会を逸したのに辟易したか、とりあえずの雰囲気転換のきっかけを求めて視線を宙に彷徨させていたバルバトスが、間を置いて数度鳴らされたインタークムの呼び出し音に再起動する。ここにハロルドがいる事を知るのは基本的に部下のみである以上、某か報告すべき事案があるのだろう。

「おい、ハロルド。貴様の部下が呼んどるぞ？……おい。……ええい、こういうのは俺の仕事じゃねえだろが！」

半ば忘我の域に踏み込みつつ、ブツブツと何事が咳きながら一心不乱にラディスロウの三面図を埋め尽くさんとする勢いで殴り書きを続けるハロルドに、呆れた顔で最大限紳士的な手加減威力のデコピン

かまして再起動を試みつつ、デスクのインターフォンを操作しドアロックを解除する。スライド式自動ドアの開く音に続き、ゴム被膜の擦り切れたタイヤの転がる音とともに、失礼します、とドアの向こうから聞こえてくるやや間の抜けた挨拶。自分の部下なら再ブレーキヤンプ不可避だな、と微妙に工兵の訓練過程に呆れを覚えつつ、まあ前線に出ないのが大前提だししかたあるまいか、と思い直したところで、カートを押す金色のツンツン頭を先頭に入ってきた5人の志願兵が、何事か衝撃を受けたような体で急停止した。より正しくは、ツンツン頭が急停止したので後ろの4人もそうせざるを得なかつたと言うべきだが。

「ば、
ば？」

ぱくぱくと口を開閉しながら呆然とする金色ツンツン頭を、後頭部をはいたり肩を叩いたりして再起動させようとする銀髪の軟派風な褐色男、その後ろで額に手を当てながらうんざりした風に首を振る仮面の少年を面白げに眺めつつ、バルバトスはとりあえずおうむ返してみることにした。芸人集団かな、という一瞬の気の迷いはあさつてに放り投げておく。

「ば、ば、バルバトス・ゲーティア中佐あ!? 本物だあ！」

「いきなり大声でタメ口きてんじゃねえよカイル！ 色々と失礼だろうが！ ……つと、失礼しました、中佐！ 孤児院出のうえ、行儀作法を仕込まれる機会がなかつたものとして」

孤児院こそ行儀作法仕込むだろ卒院後の就職優位性的に考えて、という突っ込みを瞬時に脳内で破棄しつつ、青の魔人は気にするなどいう風に、ペコペコと頭を下げる褐色男に重々しく頷いた。どうにも突っ込みどころの多いメンツだが、褐色男は正規の教練を受けたと思しき体捌きだし、仮面の少年に至つてはどこぞで見覚えのあるような、しかしどうにも判断に迷う重心移動と運足をしている。やたらキラキラした目でこつちを見るツンツン頭も、体捌きや重心移動は素人のそれではない。

残りの少女2人も後衛としては並の正規兵を余裕で超える力量を

持つ、と瞬時に看破し、まあハロルドもなんだかんだ言つて観察眼は卓越してゐるし天上軍のスパイではなかろう、スパイにしちゃ目立ちすぎるし、と自身の部下でもないし丸投げ上等を決め込んだバルバトスは、彼らの上司の簡単な扱い方だけ教えてさっさと帰ることにした。「放つとくと延々研究に没頭し続けるから、適度に再起動させてメシなり風呂なり誘導しといてやれ。俺は帰る」

「あ、ゲーティア中佐！　帰る前にサインください！」

「おいコラカイルう!?　俺ついさつき失礼だろつつたよなあ!?　人の話聞いてたか、このバカイル！」

「カイル、さすがにこの状況でそれはどうかと思うの……」「こういう場合、あたしは何て言えばいいんだい?」

「……この馬鹿どもがッ」

「とりあえず、文面は“カイル君へ”で構わんか？　サイン書くのは初めてだから、ようわからんのだが。それと何に書けばいいのかもな」

実は旅芸人一座か何かじやなかろうかと内心本氣で悩みつつ、退室前に差し出された手帳に、律儀にサインを書いてやるバルバトスであつた。

なお、ハロルドは強制リブートの試みもむなしく改修案の書き殴りに戻った模様。